

For Honor : Another

fer

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今更になって何故for Honorのストーリーをいじってるのかは、私にもわからない。

ifって言うほどifって無い気がするけど気にしない。

アポリヨンの所為っていうか、半分はヴァイキングの所為じゃないかって思ったり帝の扱いがどうもなと思ったりしていた最中。ふと紅葉をヒロインにしたらいんじゃないかと思つて

思いついたものを短編的にしたらサクサクつてできるんじゃないかなと考えた結果そんなことは無かった。

そんなに長くはないのだけれどもなんか大変だった。

全3章・1章2話の計6話

pixivとのマルチ投稿です。違いは特に無し

大きな変更点

①ステイガンドルを若者へ

②帝を世襲制に

キャラクター紹介

〈第1章・騎士〉

ウオーデン

―誓いを立てた騎士

ハーヴィス・ドーブニー

―ウオーデンの仕える君主

アポリヨン

―ブラックストーンリージョンを興した君主

ホールデン・クロス

―ブラックストーン。アポリヨンに仕える副官

アデマー

―ブラックストーンの騎士

マーシー

―ブラックストーンの女暗殺者。

グズムンドウル

―ヴァイキング氏族の統治者

〈2章・ヴァイキング〉

レイダー

ステイガンドル

若者

ルナ

ヘルヴァー

シヴ

藤清

刀千

帝

亜由

大熊

鬼山

藍蛇

毒蛇

清十郎

―グズムンドウルの盟友

―グズムンドウルの義息。古の偉大な統治者の血をひく

―ステイガンドルの下に集った若き女槍術使い

―ステイガンドルの下に集った若き双斧使い

―グズムンドウルとレイダーのかつての友。

氷女と恐れられた双斧使い

―侍最強の称号剣聖と称される男。

世界にその名が知られた生ける伝説。老将

―帝の守護者。帝直属の護衛集団近衛兵の指揮官

―侍たちの国。暁の国の統治者

―五大名の一人。五大名唯一の女大名

―亜由の臣下。鬼の面をかぶった大男

―五大名の一人

―五大名の一人

―五大名の一人

―五大名の一人

ストーン

— ブラックストーンにより解体された
— アイアンリージョンの指揮官

〈3章・侍〉

とある侍

— 剣の才を見込まれ侍になった男。
主を殺した罪で囚われている。通称主家殺し

紅葉

— 亜由の臣下。薙刀使いの女

目次

第一章・騎士／第一話へ誓いの騎士へ

1

第一章・騎士／第二話へ北の主へ

20

第二章・ヴァイキング／第一話へ守るべ

きものへ

第二章・ヴァイキング／第二話へ伝説

へ

第三章・侍／第一話へ主家殺しへ

90

第三章・侍／第二話へ狼達へ

111

第一章・騎士／第一話〈誓いの騎士〉

— Prologue —

始まりが何だったのか、知っている者はもう残っていない。

伝えられている僅かな断片を信じ繋ぎ合わせたとすれば、それは大規模な地殻変動と、それに伴い発生した気候の変化だっただろう。

しかし、いつもそうであるように、なぜそうなったか、などという事は、後の学者たちの玩具にすぎず。その時を生きている者達にとつては何の意味も持たない。気候変動による不作から起きた飢饉。そこから発生し、燃え上がった戦火が千年続いていた。飢えと死。それだけが、今生きている者達が思いを巡らせられる唯一のモノだった。

— 誓いの騎士 —

湿った土を、蹄鉄を打った蹄が蹴り上げて、後方へと散らしていく。全身に馬鎧を纏い。その上に完全武装した私を乗せた愛馬の息は荒く乱れている。兜は随分前に脱ぎ捨てていた。顔には汗が滲み、滴っている。戦場の汚れもそのままに、私は長大なポール・アックスを握りしめ、馬を急かした。馬はそれに応えるように命を削って走る。まるで長年共に戦場をかけてきた私の焦りを読み取っているかのようだった。

丘の上にようやくたどり着いたとき、馬は口から泡を吹き、倒れた。私は馬上から投げ出されながらも転がるように着地し立ち上がる。馬は死んでいた。だが、それを悼んでいる時間は無い。重い鎧を引き摺るように走り出す。夕陽を背景に、それに負けじと立ち上る赤。それは蛇の舌のように、ぬらぬらと揺れ、その先で黒煙へと変わる。丘に登り切った時、燃えている村が見えた。現実にはならぬように願っていた想像が、今、目の前で起こっていた。崩れ落ちそうになる体を強引に持ち上げて、私は叫んだ。ポール・アックスを抱え、村への斜面を駆け下りる。まだ間に合うはずだ。絶望の中で、そう言い聞かせた。

騎士の領域、アッシュフェルドには七人の君主が存在し、覇権を争っていた。

だが、今やアポリヨン率いるブラックストーンリージョンが抜きんできている。同盟を結び、前後からブラックストーンに抵抗を続けていた二人の君主の片方が死に、勢いを増したブラックストーンの猛攻によって、もう片方の君主ハーヴィス・ドーベニーに残されたのは、僅かな手勢とウエストホルド城だけになっていた。もはや陥落は時間の問題であったが、それでもハーヴィスは抗戦を命じた。ブラックストーンに恭順するということ、すなわち君主の死を意味していたからだ。例外は無い。今まで三人の君主の首が飛んだ。ハーヴィスは残された四人の君主の一人。そう、そもそもアポリヨンは君

主ではなかった。遙か古の君主たちがそうだったように、己の力によって、君主の地位を獲得したのだ。そして今やどの君主もなしえなかった騎士世界の頂点に立とうとしている。

偉大なる賢王と呼ばれた父から血によってその座を受け継いだ出来ないハーヴィスは、一瞬でも自らの命を保つ為に、どれだけ犠牲を出しても良いと考えているらしい。この城に残っているのは、行くあての無い者。ブラックストーンに寝返ることも、ハーヴィスに反旗を翻す気さえない者ばかりだった。もつとも、慎重なハーヴィスは自らの周りを信頼のおける騎士の集団、親衛隊と呼ぶ者達で固めており、近づくことも叶わない。親衛隊と言えば聞こえはいいが、実際のところは御しやすく自らに従順な若者たち、ドーベニーと言う名と富に群がるおべつか使い共。賢王の時代から仕えていた重臣たちは冷遇され、勝ち目のない戦いに送り出され、誰も戻らなかった。老騎士達は、自らの死によって、ハーヴィスが、己の愚かしさを悟る事を願ったがその命は無駄に散った。

私がまだ、此処にいるのは信頼されているからでは無く、最後の盾とするためだ。まさに今この時の為に私はこの城に残り、先達を見送り続けてきた。

当然、城に籠る騎士たちの士気は低い。ただ死を待つ愚か者。誰の目にも、生を諦めた空虚な色が浮かんでいる。私も同じようなものなのかもしれない。

だが、たとえ負けると解つていても退くことはできない。愚かな君主だとしても、私はウォーデンだ。神の御下へと逝つてしまつたあの偉大な賢王から、今、胸元に提げられたタリスマンを授かつた時に誓いを立てた。どんな敵にも退かず、領土と、そしてなによりも民の為。平和を守る為に戦うと、死を前にした賢王の最後の願い。それに私は領いたのだ。この城には賢王との思い出があり、戦火から逃れようと駆け込んだ民がおり、そして、この城の背後にもまた人々の暮らしがある。退くわけにはいかなかった。

「城壁へ奴らを近づけるな」

叫びながら城壁へ向かい走る。

尖塔を抜け、開けた視界の中、城壁の下に広がるのは、ブラックストーンの強大な軍勢。投石機に、巨大な破城槌が向かつているのが見える。城門が開かれれば終わりだ。

黒い塊が視界に映る。衝撃、城壁が大きく揺さぶられる。投石器から射出された岩が城壁を直撃したのだ。咄嗟に壁に手を当てていなければ転倒していた。砕け散る石レングの欠片を、手を翳して防いだ。城壁の上にはいた騎士の何人かが、衝撃で城内へと落とされたのだろう。悲鳴が尾を引くように流れていく。急ぎ城内を見下ろせばもはや動かなくなつた騎士たちの姿。崩れてきた瓦礫に埋もれている騎士の生存は絶望的だ。

「くそっ」

城内の惨状から目を離し、まだ生きている負傷兵を下がらせる。投石機のもたらした

被害と眼下に迫る軍勢に、騎士たちの攻撃が鈍る。

「射掛け続ける」

鼓舞しても無駄だと知りながらも指示を飛ばす。城壁にかけられた梯子から、敵の騎士が登ってくる。西を守れば東が、東を守れば西が手薄になる。手が足りない。ハーヴィスは何をしている。御自慢の騎士たちは・・・

登ってきた何人かの騎士を倒し、最後の一人を梯子ごと落としてから違和感に気付くひっきりなしに飛んできていた投石の音が止んでいる。数瞬後、代わりに響いたのは城門の扉が叩かれる音だった。

「門が！」

騎士たちが急ぎ扉を抑えるが、再び聞こえた衝撃音と共に、吹っ飛ばされる。扉が軋む、木製の表面はひび割れ、木屑が散る。そして、突き入れられた巨大な槌によって門が折られ、扉が破られた。

騎士たちの間から、絶望の呻きが漏れ、怖気づいたように後ずさりを始める。立ち込める土煙の中から、黒と黄で塗られた鎧を纏う騎士たちがなだれ込む。

「防陣形！盾を構えろ！」

何人かの騎士たちがその指示に従って防陣形を組もうとするが、大半の者は恐慌状態に陥り指示を聞いていない。完全に統制が取れていたとしても、城門が破られた時点

で、既に勝敗は決している。今、私がしようとしている事は、兵の死を、僅かに遅らせる。ただ、それだけの虚しい抵抗だった。だが僅かに踏みとどまった少数の騎士たちでは、時間稼ぎの防御陣形すら形成できていない。このままでは虐殺が起きる。逃げる騎士たちを押しつけ前に出、剣を構えた。だからどうなるというわけでもない。こんなものはやウオーデンとしての矜持だ。前方全てに敵の壁。数瞬後に訪れる自らの死を想う……。

だが敵の騎士たちは、剣こそ構えていたが、斬りかかつては来なかった。困惑した私たちを残し、黒と黄の壁が揺れる。騎士たちの壁をかき分けて一人の偉丈夫が姿を見せた。体軀に見合った大型の鎧。両肩には、精緻な獅子のレリーフ。手には、長大なポール・アックス。その騎士が一步踏み出すたびに、胸元につけられた巨大な鎖が音を立てて揺れる。噂に聞いた通りだ。ホールデン・クロス。アポリヨン率いるブラックストーンリージョンの副官。

ホールデン・クロスは、騎士たちの先頭に出ると、ポール・アックスの石突を地面に突き立て、場内を見回して叫んだ。

「ドーベニー、何処にいる?」

獅子の咆哮のようなその声。

「出て来い。ドーベニー」

だが、城内は静まり返っていた。誰も返すべき言葉を持たない。怖れ、それもあるが、答えなど、誰一人として知らないからだ。

「ドーベニー」

ホールデン・クロスはいらだったようにもう一度吠えた。

「無駄だ」

応える声があった。冷え切った女の声。聞いた者の、心の臓を掴み凍て付かせるような。

ホールデン・クロスが振り返ると、騎士たちの壁が割れていた。皆畏れているのだ。その女を、味方の騎士達ですら……。黒い鎧に外套を纏ったその女は割れた騎士たちの間を、悠然と歩んできた。アポリオン。見たのは初めてだが、一目見ればその異様さに気付く、隣に立つホールデン・クロスをも超える威圧感。だが、何がそこまで感じさせるのか言葉にすることは難しい。一見すれば、体格は華奢にすら見える、しかし、その声、立ち居振る舞い。それら全てによって、まるで捕食者の前に何も持たずに立っているかのような感覚を与えられる。鎧に付いた数多の傷と、その腰に提げられた鈍い輝きを放つ大剣が、単なる飾りではないことを主張していた。

「奴は逃げた」

退屈そうに、アポリオンは言った。

「ならば、すぐに追撃を」

「及ばん」

「しかし」

「どうせ臆病者だ。それよりも、もつと面白そうな奴がいるじゃないか」

アポリヨンは、値踏みするように此方を窺っていた。

「ウォーデン、ウォーデンか……未だそのような者がいるとは、さて、お前の主は逃げ、城は既に落ちている。立ち塞がれば死だ。さて、どうする？」

「民と此処にいる兵たちの処遇は？」

それを聞いたアポリヨンは、数瞬沈黙した後、吹きだすように笑った。

「ウォーデンの誓いか、このような状況に陥っても手放さぬか、いいぞ、気に入った。この城も、領土も民もどうしようが私の考え一つだ。だが、お前を見込んで特別に提案をしてやろう」

アポリヨンが何を笑っているのか分からない。違和感。実際のところ、この城や、領土、民に欠片も興味が無いように思えた。

「提案？」

「そうだ、お前が、私の用意した騎士と戦い勝利したならば、我々はこの城の騎士たちも領民も全て許し、引き上げよう。ただし、お前をブラックストーンに招き入れるのと引

き換えに」

味方の騎士と決闘をさせ、勝利すれば引き上げ、仲間に取り入れるなど、聞いたことも無い。

「なぜだ」

「未だに誓いなどを立て、律儀に守っている。お前に興味があるからだ。だが、私は、信念だけを持つ者に用はない。答えは……聞くまでも無いな？。アデマー」

その声と共に、一人の騎士が歩み出た。粗野な印象の騎士だった。だがその姿に隙は無く、周りの騎士の声や態度から、アデマーと呼ばれたその騎士が、相当の手練れである事が分かる。ブラックストーンの騎士達が下がり空間をつくる。進み出たアデマーが剣を構えた。私もそれに応じる。

私の剣先はアデマーの喉元に、アデマーの剣先は私の喉元を指していた。じりじりと間合いを詰める。その一瞬は永遠のように感じられ、互いの距離は果てしなく遠くなる。早くなる鼓動。浅く息を吐き、大きく踏み出す。それにアデマーが応えた。先に振るわれたのは、アデマーの剣。私はそれを剣で受け、強く押し返す。甲高い金属音。アデマーが押し負け後退、体勢が崩れる。追撃を加えようとさらに踏み込みながら剣を振り降ろす。アデマーは身をひねりながら回避。さらなる追撃の為、斜め下から斬りあげようとする動きの途中、咄嗟に剣を縦に構え盾とする。その刃を打ち付けるアデマーの

劍。僅かに角度をつけていた刃によって流され、その上で悲鳴をあげるように疾駆した刃は、私の身体の側面を抜けた。

アデマーは辛うじて回避したと見せかけ、身をひねり、突きを放ってきたのだ。なんという邪劍。突き出された劍を巻き上げるように弧を描かせた斬撃を、アデマーは、劍から片手を離し大きく引くことで、巻き上げられることを防ぎ、同時に無防備になった身体を後方へ跳躍する事で守った。

劍による防御をおこなわない見切りの劍。恐ろしいまでのセンスだ。一度でも見誤れば、死に直結する。アデマーはそれをまるで楽しむかのようにやってのける。後退したアデマーは、肩に据えるように劍を構え直す。突きの構え。

アデマーは突きを主体にしていた。戦い方こそ異様であるが、その選択は合理的だ。全身を甲冑に覆われた騎士同士の戦いでは、斬撃は、鎧の隙間を狙わなければ効果は見込めない。だが突きならば、切っ先は、鋼の鎧をも貫通し肉に突き立つ。

だからこそ私は前に出た。ここで臆し距離をとれば、突きの威力は完全な物となり、選択肢も最大化する。放たれるアデマーの突きを、紙一重で躲す。鎖帷子の一部が弾け飛ぶ。そのまま強襲。こちらのタックルをアデマーは、横ステップで回避。それを予測して、即座に劍を薙ぐ。これにステップでは対応できなかつたアデマーが、劍で受け、逆にこちらの劍を絡めとろうとする。解っていた事だが、アデマーは単なる突き一辺倒の

騎士では無い。それを強引に押すことで、拮抗させる。さらに押し込む。交差した剣は、ゆつくりとアデマーの方へと動く。単純な膂力では私の方が勝っている。だが、ここからだ。押し込む力を利用して、アデマーは私の体勢を崩し一撃を狙うだろう。アデマーが、剣を逸らす。同時に私は前転。私の身体のすぐ上で風切り音。立ち上がり剣を構えようとする私に、アデマーの突き。正確に、兜と甲冑の隙間を狙ってきたそれを、首をひねる事で躲す。鎖帷子を切り裂き、刃が、私の首を掠める。同時に、斜め下から突き出した私の剣が、アデマーの首へと到達する。アデマーもまた首をひねる事で躲す。そして速度を優先させたことで圧の乏しい剣ではアデマーの鎖帷子を切り裂けない。仕切り直しを確信したアデマーの眼が兜の面越しに見えた。

だが、そんな事はさせない。密着状態からさらに前へ、体を回転させながら、アデマーの首筋に当てた剣を振り切った。ゼロだったエネルギーを身体の動きによって生み出し、強引に剣圧へと変換したのだ。アデマーの鎖帷子はねじ切られ、その首は深く切り裂かれた。噴出する血と共に、アデマーの身体が倒れていく。自らの首に手を当てれば、アデマーが最後に放なった突きによってできた傷口から、血が垂れている。もう数ミリ、アデマーの剣先がずれていれば、私が致命傷を負って敗北していただろう。

城内は沈黙に包まれていた。アデマーは倒したが、それによって、ブラックストーンの騎士達がどう動くか、攻撃が再開されれば、もはや死ぬ他はない。誰もが戸惑い、立

ちすくむ中、女の笑い声が響いた。アポリヨンが肩を震わせて笑っていた。

「ああ、素晴らしい。素晴らしいぞウォーデン。約束を果たそう。そして、ようこそブラックストーンへ」

それだけ言つて、アポリヨンは踵を返した。ブラックストーンの騎士達全てが、それに従つた。ホールデン・クロスだけが、こちらを見ていた。

「行くぞ、ついてこい」

ホールデン・クロスはそう言つた。そして私はブラックストーンの騎士となつた。

城門をくぐつた後、一度だけ振り返つて仰ぎ見た城は、何処か見慣れ無い城のように思えた。人生の大半が、そこにあつた。これが、亡き賢王への忠誠となるのか裏切りとなるのかは分からなかつた。ただ、私は失つたのだ。胸元で揺れる誓い。それ以外の全てを……

ブラックストーンの膨大な騎士達、その先頭を進むアポリヨンの馬に、私は自らの馬を寄せた。

「試す必要が？」

「無かつたと？ 私はそうは思わん。力無き者など不要だ」

アポリヨンのそつけない返答に言葉を重ねる。

「アデマーは優秀な騎士だった」

「ならば、もつと優秀な騎士が手に入ったという事。加えて、もしもあの場所で、私が条件を提示しなければ？アデマーと言う勇猛な騎士との決闘で幕を引かなければどうなったと思う？」

その言葉に、私は返す言葉を失う。

戦いは終わらなかつただろう。アデマーと言う一目置かれていた騎士を出したことで、兵たちは大人しく従つたのだ。アポリオンは、畏怖されていたが、それだけでは今や、騎士世界一の規模に膨れ上がった軍団を統率することはできない。

「・・・それに、あいつが、いつまでウオーデンの誓いにしがみ付いてられるか、愉しみだとは思わないか？」

言葉には、加虐的な響きがあつた。その問いかけには答えず。僅かに速度を落としたり私を気にすることも無く、アポリオンを乗せた馬は、ゆっくりと歩んでいった。

「あああああああああ」

床下へ続く扉が開かれ、見知らぬ男が顔をのぞかせた時。父が叫ぶのを初めて聞いた。

私や姉の頭を良く撫でてくれた細い指は、冷たい金属の柄を握りしめ、叫び声と共に

その背は離れていった。不格好な構えで突き出された護身用の剣。ろくに手入れもされていなかっただけの切先は、男の着ていた鎧を貫いたように見えた。

けれど、それだけだった。剣は、鎧に穴をあけたが、それ以上動くことは無かった。その返答のように繰り返された剣が、父の胸元から差し込まれ、その背から生える。苦痛に呻きながらも父の手は、握った剣を必死に押し込もうと震えていた。

それが、父の最後の動きだった。

剣が引き抜かれた事で、支えを失った父の身体は、階下へと転げ落ち、男の鎧に僅かに突き立っていた剣も重力に引かれ、石の段上で一度だけ跳ねた後、滑るように転がった。姉は悲鳴を上げ、私たちは母の震える体に強く抱き寄せられた。私は、母の身体から抜け出そうとしていた。床に転がっている剣を手に取りなければならないと思つた。

横一線に振るわれた男の剣が、母の背を深く削り、姉の首を切り開いた。姉の悲鳴は、喉が切り裂かれた事によって声を失い、空気の抜けるような音に変わった。剣に手を伸ばすために身を低くしていた私だけが、傷一つ負う事なく生きていた。

母が力を無くしても、姉の首から噴き出した血が、私の手を汚しても、私は何も感じ無かった。ただ、床に落ちている剣の、錆びついた中に見える輝きだけが私の目を捉えていた。母の身体の下から転がり出た私が、剣を拾い上げたのを見て男は嗤った。

男はわざとらしく、剣を振りかぶった。私が、手にした剣で、それを防ごうとすると

思ったのだろう。私はそのまま踏み込んで、鎧が覆っていない喉元へと剣を突き出した。

「あつ」

男の目が驚愕に見開かれ、その口からは、間拔けな声が漏れた。男は何が起こったのか分からないという顔。私にもわからなかった。ただ、今まで感じた事の無い熱い何か、体中を駆けまわるのを感じていた。男の首から剣を引き抜くとその喉からは血が降り注ぎ、身体は力を失って崩れ落ちた。私はそれをたまらなく愉しいと思った。今までしたどんな遊びよりもずっと愉しかった。

狭い地下室は、母と姉、父と見知らぬ男の死体で埋まり、四人から流れ出た血が、混ざりあって広がっていた。階段の上から僅かに差し込む光が照らすその赤は、それぞれが別の身体から流れ出て、それでいて見分けがつかない同じ色をしている。倒れている身体も同じだと思った。違う姿、違う声、違う気持ちを持つていた筈の誰もが、今や皆同じ、物言わぬ肉になっていた。握っている剣に、差し込んだ光が当たり、その表面を伝うねっとりとした血の赤が輝いたとき、私は母が眠る前に読み聞かせた聖書、そこに登場する聖人たちが体験した奇跡を感じ、天啓を知った。私は階段を上がった。光差す天使の梯子を・・・

天蓋付きの寝台を医師や聖職者そして従者と臣下達が囲っていた。誰もがその顔に悲痛な表情を浮かべている。寝台に臥せるのは、髪や髭も白くなり、やつれた王だった。

王はまさに死に瀕していた。かつて、あれほど大きく見えた。その面影はもはや無く、寝台がやたら大きく見える。本来ならば安静にしていなければならぬが、王がそれを望み。もはや手の打ちようが無くなった医師達がそれを認めた。そして、決して広いとは言えぬこの寝室に、誰もが集つたのだ。

王は一人ずつ寝台の側に呼び寄せては、震える指で手を握り、言葉を交わしていた。鬼とさえ呼ばれた老将が泣き崩れ。王は、それを見て微笑む。老将の涙に、従者たちが耐えられなくなつて咽び泣く。誰もが王の生を望んでいた。だが、そこに息子であるハーヴィスの姿は無かつた。

それを責める者達もいたが、王を前にしてそれを口にする者はいなかつた。ハーヴィスは恐れたのだ。絶対的な父の死を前にそれを受け止めるだけの器を、ハーヴィスは持つていなかつた。このような時であつても、自らの供回りを連れて享樂にふけつていのだろうか。いや、このような時だからこそ……。

王が健やかなる時にあり得なかつた光景が、今起きると思つていなかつた。だが、今にも、寝室の扉を開けてハーヴィスが駆けつけてくるのではないか……それは私の望みだつた。扉が開くことは無く、私は王に呼ばれた。前のものと入れ替わり、私は王

の寝台へと近づくと、王は私を見て微笑む。私の手を取ろうとする王の手を、こちらからそっと握りしめる。

「それを授けた時の事を、今もよく覚えている」

王は、私の首から下がるタリスマンを見て言った。

「私も、忘れたことはありません」

「ウォーデン。そなたはまさにそう呼ばれるにふさわしい。．．．そなたが、息子であつたなら、何度そう思ったか、我が息子は．．．不出来だ」

口を開こうとした私を、王が制する。

「良い、何も言うな。ただ聞いてもらえないか」

私が頷くと、王は続けた。

「だが、思えば、私がそうしてしまつたのだろう。誕生と共に母を失つた息子に、私はただ与えるだけのことをしてしまつた。私は、愛情を教えてやれなかつた。ただ、与えられる事だけを教えてしまつたのだ。君主として修めておくべき事柄を学ぶ機会すら奪つてしまつた。あれを立派な王にするという。妻の最後の願いすら。私は叶えてやれなかつた。こんな私のどこが、どこが賢王なものか．．．」

王のその嘆きに、私は答えることができなかつた。王は、ただ守りたかつたのだ。愛する妃が残した、たつた一人の息子を．．．数秒の沈黙があり。そして王は私の手を握

る力を強めて言った。

「我が家など、もはやどうなつても構わん。ただ、民とその平穩だけは、守らねばならぬ」
「私は平和の為に戦うと誓いました。その気持ちは今も変わっていません」

そう言つて私が力強く頷くと王は微笑んだ。

「ありがとう。そなたはこれから生きる者だ。だからそなたに未来を託したい。此処に集つた誰にもこれは任せられぬ。……皆、老いてしまつたからな」

室内をゆつくりと眺めやる王の顔には寂し気なものがうつり、私は王が最後に、寝室の扉に目を止めたことに事に気付いた。私に気付かれたことに気付くと、王は力無く笑つた。

「起こり得ぬと解つていても、あの子を待つてしまふ。今にもここにやつてきて、私の手を取つてくれぬかと、私は謝り、その謝罪を受け入れたあの子が、立派な王として立たぬかと……そんな事はあり得ぬ。あり得ぬのにな……」

その言葉を聞き、やはり王がそれを望んでいた事を知つた。だが、今、この寝室を飛び出し、ハーヴィスを殴りつけて引き摺つてきても、それは違うのだ。王の最後の願いを叶えてやれるのは一人だけ。ハーヴィスの自由意思による行動だけなのだ。寝台から離れても、私は願つた。願い続けた。

そして、王が目を閉じ、その息が止まつても、扉が開かれることは無かつた。

村の広場に立てば、見渡す限り村は燃えていて、辺りには死体が散らばっている。半分は彼らが、彼らは私がそうした。ただ、私一人が、息をしていた。

最後の一人から受けた剣。それが生んだ顔を斜めに走る剣傷から血が滴っている。水の張られたままの桶を覗き込むと、炎に照らされてぼやけた醜い顔が見えた。顎を伝い落ちた血の滴が、水鏡の中で啜う醜悪な顔を赤く染めていく。それを見て私は啜った。

私は今生まれたのだ。新しい名前が必要だった。私を表すに相応しい名前が……。

第一章・騎士／第二話へ―北の主―

―北の主―

村には、沢山の死体があつた。

数少ない村の警備隊が皆、劍や盾を持つたまま息絶えていた。

気のいい奴らだつた。村に戻つてきたときには必ず訓練をせがまれた。

戦場へと赴く前、自分たちが村を守るからと笑つて言つていた事を思い出す。それが果たされなかつたとしても、彼らは逃げなかつたのだ。最後の一人まで、村を守ろうとして死んでいった。それがその遺体の状態から痛いほど良く分かつた。

村からはもう、木材の焼ける音しか聞こえなかつた。襲撃者たちはもう立ち去つたのか？ そう考えながらも慎重に生存者を探して進んだ。

焼かれた家、その崩れ落ちた木材の下から、炭化し、もはや誰なのか分からなくなつた人の手が伸びていた。

小さな畑では、老人が死んでいた。その横には、鍬が落ちてゐる。戦おうとしたのだろう。子供のころから世話になつた人だつた。老人には、身寄りが無かつた。子供はおらず、妻とは死に別れた。そう聞いた。小さな菜園が趣味で、できた野菜を良く貰つた。

会うたびに、立派になったと言つては、肩を叩かれた。その身体が、今は枯れた枝のように見える。

燃えずに残っていた家を覗けば、折り重なるように死んでいる夫婦の死体があつた。

彼らはまだ、新婚だつた。出立前に生まれた赤子を抱かせてもらった。赤子の相手は苦手だつたが、断り切れなかつた。抱いた赤子は、すぐに泣きだしてしまつたが、これできつと貴方のように強い子になると夫婦は喜んでいた。

襲撃者たちは、夫を殺した後、彼女を犯そうとしたのだから。服が強引に剥ぎ取られている。それでも抵抗を続けた彼女を犯すことを諦めた襲撃者は、そのまま彼女を刺し殺したのだ。そして、先に死んでいた夫の遺体の上に捨てた。近くにあつた布を掴み、彼女にかけてやろうとしたときに気が付いた。壁の下で、赤子がぐったりと横たわっている。もう息が無い事は一目でわかつた。彼女は、我が子を守ろうと抵抗を続けたのだろう。それに苛立つた襲撃者たちは彼女を刺し殺し、その腕に抱いていた赤子を引きはがして、まるでゴム毬のように壁に叩きつけたのだ。あり得ない方向に曲がつた首。投げ出されるように伸びた小さな手足。祝福されて生まれた命は、汚い手で玩ばれ、奪われた。

進めば進むほど、足は重くなつた。悲しみとそれ以上の怒りが溢れるのを感じた。もし襲撃者を見つければ殺す。立ち去つていたとしても、どこまでも追いかけて殺

す……。そのつもりだった。

だが、村の奥に進むと村人たちに混ざり襲撃者達とおぼしき死体が点々と散らばっていた。全員が剣によって殺されている。そんな事を為せる者を私は知らなかった。そしてその死体の様子から、略奪品をめぐる同士撃ちではない。何が起こったのかまるで理解できない。立ちすくんだその時、炎の爆ぜる音に紛れ、微かに乾いた笑い声が聞こえた。

あの日から数年が経っていた。騎士世界の大半を掌握したブラックストーンはヴァイキングの土地を目指して進軍している。ヴァイキングたちの土地は、遙か北方に位置し、私たちの進軍を阻むように、冷たい風が吹き荒れていた。

針葉樹の森には雪が積もっている。初めの内こそ騎士たちは、その雪を珍しがっていたが、今や退屈な風景となった。本格的な冬が到来すれば、雪に閉ざされるだろう土地を、私たちは追い立てられるように進む。

疑念はあった。これまでも必要とは思えない戦いをアポリオンは行っていた。その戦いでどれだけの民が犠牲になったか、それは民を守ると誓いを立てた私に重い澱みとなって蓄積されている。そして今回のヴァイキング攻めだ。ヴァイキングとは小競り合いはあったが、脅威になるほどの存在とは思えなかった。確かにヴァイキングには強

力な統治者、グズムンドウルが台頭した事によつて、部族間の抗争が終了し、まとめられていと聞いたが、それを危険視するのであれば、北方へ攻め込むよりも守りを固めたほうが理に適っているだろう。この雪の地を見れば、犠牲を払い手に入れたとして、維持するのは難しく、穀物の収穫も望めそうにない。それでも私たちは進み続けた。

斥候であるマーシーの報告をもとに、幾つかの砦を落としながら、奥深くへと攻め込んだ私たちに、アポリヨンが最後に示した目標は、巨大な要塞だった。スヴェルンガルド要塞。ヴァイキングたちはそう呼ぶらしい。そこにヴァイキングの統治者グズムンドウルがいるとアポリヨンは言った。見れば、要塞は既に防衛体制をとっていた。要塞内部から投石。それにこちらも投石で応じる。巨大な破城槌を伴つて、我々は進軍した。

城門が、巨大な破城槌によつて揺るがされている。破られる時が近い事は誰もが理解していた。皆、手に斧や剣を持ち、その時に備えている。誰かが、雄叫びを上げれば、それに皆が応える。これ以上後が無いのだ。私も剣を持ち、構えていた。剣の訓練は幼い頃から受けていたが、実戦の経験はほとんどなく。まして今更これほど大規模な戦いが起こるなど考えたことも無かった。緊張から手が震える。それでも、私は先陣をきつて戦い、皆を鼓舞しなければならぬ。祖先たち、なによりも義父の恥にならぬように、深

く息を吸い込み、強く足を踏み出す。前に進もうとした身体が、急に後ろへと引かれた。振り返れば、見知った顔が笑っている。

「見つけたぞ。グズムンドウルが呼んでいる」

「離せ、私は」

二本の片手斧を腰に提げたその男は、私の抗議を無視し、その剛力によつて私の身体は無理やり引き摺られてゆく。仲間たちが雄叫びを上げて前に向かう、私の側を通り過ぎる仲間たちが私の肩を叩きながら、笑顔を向けて歩んでゆく

「離せ、私も戦うのだ。皆と共にこの地を守るために」

叫んだその声は、仲間たちの雄叫びによつて掻き消された。

仲間たちの背が、城門へと向かう中、私だけが、後方へと引き摺られていく。

門を破り踏み込んでみれば、そこは我々が用いる城のような単なる軍事施設では無いようだった。ヴァイキングの建造物は、確かに我々の様式とは大きく異なるが、この要塞の最奥には大きな倉庫のような物が、いくつも建ち並んでいる。何かの集積場のようにも見える。そして奥へ進むたびにヴァイキングたちの攻撃は苛烈を極めた。彼らの神が戦死者をヴァアルハラと呼ばれる天国へと導く事は知っているが、それにしても、異常な戦いぶりだ。まるで逃げ場がないとでもいうように向かつてくる。それは今まで

落としたどの砦でも見られなかった事だ。

そして、いよいよその倉庫のような建築群の中でもひととき大きな物の間近に迫った時。そこへ多数の狼を引き連れて、一人の男がやってきた。

金属製の羽飾りをつけた兜。蓄えられた髭は束ねられ。髪もまた幾筋かの束とされている。身に纏うのは狼の毛革。今も男の周りからこちらを窺っている狼たちの先達ならば、死してなお、主を守っている。

「グズムンドウルだ」

男をみた騎士の中から声が上がり、どよめく。

その隙を見て、グズムンドウルは狼たちをけしかけた。跳びかかる狼に、味方は混乱し、そこへグズムンドウルの背後から現れたヴァイキングたちが殺到。騎士達を押し返していく。狼たちが戻ってくると、そこには私とグズムンドウルだけが残された。それほどどの信頼を目の前の男は得ている。グズムンドウルならば負けることは無いと、そしてグズムンドウルは、私を自らが当たるべき敵として認識したのだろう。

それは名誉な事なのかもしれない。

ヴァイキングたちを束ねる偉大な統治者は、円形の盾を構えると、無骨な片手剣を抜き放った。そのままグズムンドウルは突進。流れるように振るわれた剣を受け止める。剣のリーチは私の方が有利だが、片手に持った円形の盾と、より小回りの利く片手剣に

よつて、接近戦に持ち込まれるとリーチの長さは生かせず。むしろ短所となる。腰を下ろし肩から盾に当たる。グズムンドウルを押し返し、距離をとる。追撃を放とうとした私に、すかさず狼たちが跳びかかってきた。狼たちを振り払えば、グズムンドウルが既に距離を詰めている。

厄介な相手だった。グズムンドウルは自らの武器の短所を理解し、そしてそれを補う為に狼達を操っている。何が蛮族なものか、グズムンドウルは完成された戦士。いや一人にして軍団であつた。繰り出される剣と盾を掻い潜り、跳びかかる狼を跳ね除ける。戦いは持久戦となり、それはこちらの圧倒的不利を意味していた。狼を一匹屠つたところで、また別の狼がその穴を埋める。繰り返せば、いつか狼を駆逐することができる筈だが、その時に、グズムンドウルと戦い勝利するだけの余力はないだろう。

だが、狼たちがいる限り、グズムンドウルの隙を生み出すことはできない。狼を払い、グズムンドウルに斬りかかる。グズムンドウルは、倉庫のような建造物の方へ後退し、代わりに狼の群れが、左右から殺到する。私はそれを無視し狼の牙が届く前に前進。待ち受けていたグズムンドウルの上段斬りを受け止め、強引に押し込む。グズムンドウルは、さらに後退。建築物の入り口付近へと到達。背後から狼たちの強襲。剣で薙ぎ、数頭の狼を斬り裂きながら、横転。先ほどまで居た位置に。グズムンドウルが刃を振り下ろしている。立ち上がりながら狼たちを牽制し、呼吸を整える。過酷だ。

不意に、空を赤い光がはしった。味方の放った多数の火矢だ。それはグズムンドウルの背後の建築物に突き立ち。屋根を燃え上がらせた。ついに、味方の後続がヴァイキングたちを突破したのだ。私は剣を構え直した。グズムンドウルが、個では無く軍であるならば、こちらもまた軍として戦えばいい。仕切り直した。

しかし、グズムンドウルは、燃え上がる建造物の屋根を呆けたように見つめていた。それは、グズムンドウルほどの戦士にとつては異様な姿だった。それゆえに、絶対の隙にもかかわらず斬りかかる事を躊躇った。

周囲から跳びかかってきた狼たちもグズムンドウルの様子に統制を失っている。だがそれが合図となった。私は狼たちを斬り払って、グズムンドウルへ向かう。グズムンドウルも私に向き直ったが、一瞬遅れる。態勢の整わぬまま、私の強引な一撃を盾で受けたグズムンドウルは、大きく弾き飛ばされる。その体躯で建築物の扉を破り、そのまま中へと倒れ込んだ。私はすかさず踏み込む。建物の中ならば、狼たちの追撃を制限することができる。グズムンドウルは転がるように建物の奥へと後退し、体勢を整えようとしていた。燃え落ちる屋根の一部。その炎が内部を照らした。中にあつたのは沢山の樽。崩れ落ちた屋根に倒されたその内の一つからは、芋が転がりだし、私の足元にまで散らばった。この建築物が何なのかようやくわかった。グズムンドウルが、怒りのこもった眼でこちらを見据えている。急に自分が握っている剣を酷く重く感じた。何の

ために戦っているのか、その疑問は私の動きを止めた。

グズムンドウルが走り、怒声と共に放った強力な一撃を、咄嗟に受け止める。だが、それ以上のことはできず、身体は大きく弾き飛ばされた。私は食糧貯蔵庫の入り口を抜け、冷たい大地の上を転がった。受け身も取れなかつた脳が揺れる。いや、受け身をとつていたとしても、立ち上がれなかつただろう。私の剣は意味を失っていた。だが、視界の揺れが収まっても、終わりはいつまでもやってこなかった。

僅かに顔を上げれば、燃え上がる倉庫の中、グズムンドウルがアポリヨンと対峙していた。アポリヨンの刃が、最後に残っていた白く巨大な狼を屠り、グズムンドウルの刃を巻き上げると、そのまま弧を描いた大剣が、グズムンドウルの首を跳ね飛ばした。跳ね上がったその首は床を転がり、燃え盛る倉庫から冷たい地面の上へと落ちる。一瞬見えたその目は、激しい恨みを宿していた。私の周りには何匹もの狼の死体が折り重なっている。倉庫群の大半は燃え上がっていた。

大剣の血糊を外套で拭きながら、アポリヨンが倉庫から歩み出て、倒れていた私に手を差し出す。

「……なぜ？」

私はその手を取らずに聞いた。

「……は、彼らの食糧貯蔵施設だった」

アポリヨンの兜に開いた暗い穴は、真つすぐにこちらを見つめた。

「ああ、そうだ。そして我らは今、目標を達成した」

「襲う必要などなかった」

アポリヨンは、私が手を掴む気が無い事に気付き、手をもどす。

そして、まるで出来の悪い子供に言い聞かせるような口調で言った。

「いや、必要だった。あの偉大なグズムンドウル、奴がヴァイキングを酷く退屈な存在にしてしまっていた。偉大な統治者の下で、狼が目を覚ますことは稀だ。狼は必要に迫られて目を覚ます」

アポリヨンは、そう言つて笑うと、私を残して去つた。私の下へと駆け寄つてきたブラックストーンの騎士達も私は無視した。

ブラックストーンが撤退を始めるなか、燃え残つた食糧と大量の死だけが私の足元にあつた。

私の疑念は確信に変わった。もっと早くに気付くべきだった。いや、本当は気付いていた。私はその現実を直視したくなかつただけだ。自らの戦いが、いつか誓つた正義の為に実を結ぶと信じたかつたのだ。その結果がこれだ。私は自らの手で誓いを破り、穢したのだ。

誓いを立てた証しであるタリスマンは、血に塗れ汚れきつている。平和を守るための

劍も、その刀身に刻まれた祈りの文字が見えぬほどに汚れていた。理想は全て消えた。私が消した。首から提げていたタリスマンを引き千切る。私はしばらくそれを強く握っていた。それを持つている資格がもはや無い事は理解していた。私は賢王を裏切つたのだ。それでも、それを理解してもなお、手は動かなかった。

随分長い時間の後、ようやく私の腕は握っていたそれを谷底へと投げた。私の所為で血に塗れたタリスマンは陽光を反射し、一瞬だけ煌めくと、汚れた谷底へ落ち、見えなくなった。

神は私を罰せず、答えを与えてもくれなかった。

そして、私は、ブラックストーンを抜けた。

追っ手は、かからなかった。

「ウォーデンが、ブラックストーンを去ると・・・」

ホールデン・クロスは、私にそう告げ、沈黙した。

「そうか」

私がそう答え、再び沈黙が戻ると、マーシーは私を窺った。

「追う必要は無い」

それを聞いたマーシーは肩の力を抜いた。

それが安堵だったのか、だとすれば、あの強者と戦わずに済むという安堵なのか、殺さずに済むという安堵なのか、それは私には分からなかった。あまり興味も無い。それよりも、野に放たれ、ようやく本当の自由を手に入れた狗が野垂れ死ぬか、それとも狼になるのか興味があつた。

奴が狼となり再び戻ってくることを私は期待していた。

村の奥にある小さな広場の真ん中、襲撃者たちの死体の上に腰を下ろし、少女は血に塗れた剣を抱えて笑っていた。体中には裂傷。甲冑の擦れる音を聞き、少女が顔を上げると、天使と呼ばれたほど美しかった顔が縦に走る無残な剣傷によつて醜悪なものへと変じていた。だが良かった。彼女は無事だったのだ。その事に希望が湧く、状況は全く理解できていなかったが、聞きたいことが山ほどあつた。名前を呼ぼうとしたとき、彼女の掠れたような声にさえぎられた。

「ホールデン・クロス、遅かったじゃないか」

その冷え冷えとした声に驚きを隠せず、それ以上彼女に近寄るのを躊躇った。聞きなれていた筈のその声は、まるで別人のように感じられた。彼女からホールデン・クロスと呼び捨てられるのも初めての事だった。

「これは……君が、やったのか？」

その疑問に、彼女は足元で死んでいる襲撃者の首を持つていた剣で突き刺してみせた。突き立った傷口から、まだ体内に残っていた血が、皮膚を伝って地面に垂れる。

「この事か？ そうだ、全て私が殺した。どうやら私には剣の才があったらしい」

にわかには信じがたいが、彼女のその姿を見れば、誰も疑う事はできないだろう。

「他に、他に生き残りは？」

縋るように発したその言葉に、彼女は薄く笑った。

「皆死んだ。お前の娘も妻も、誰もかも」

彼女の剣が指し示した先で、愛おしい娘の顔が何もうつさなくなつた目で空を見上げていた。手から、ポール・アックスが抜け、地面に落ちた。駆け寄つて、抱き上げる。その身体は、重力に逆らうことは無く、ただ冷たく、重かつた。

名前を呼んだ。何度も、何度も、頬を摺り寄せれば、涙がとめどなく溢れた。隣には、剣に貫かれたまま倒れた妻が死んでいた。娘を抱いたまま。妻の手を掴んだ。その手も冷え切っていた。

自らの力を取り立てられ、ここまで来た。出世し、もう直に家族を城下へと呼ぶ筈だった。村の希望ともてはやされ、いづれこの辺りの統治を任されたときには、この村を守り、発展させたい。そう願っていた。そのすべて失われていた。もはや、戦う意味すら無い。何もできなかつた自らの無力さを呪う慟哭は、ただ虚しく響いた。

それから、穴を掘った。ただ無心に墓を掘り続けた。全て終わった時。いよいよ何も無くなってしまったと思つた。もうする事すら無くなつていた。うなだれる私の後ろに、静かに彼女が立つた。

「残念だつたな。生き残つたのがお前の娘でなくて」

冷めたその声に、答えることはできなかつた。そんなことは無いなどとは言えない。その通りだとも言う事もできない。

「もしも悔やんでいるのなら。私と共に来い」

彼女は、問いかけた答えを待つことも無く、平然とそう言つた。

「今更何のために・・・」

もはやすべては虚しく思えた。

「意味が欲しいのなら、私が与えてやる。お前が救えなかつた全ての、お前が守りたかつた全ての、その残滓が私だ」

私は、見知っている少女に対し、今や恐ろしさを感じていた。彼女は生き延びたが壊れてしまったのだろうと、だが死んでしまった娘は、彼女と共に行く事を望むだろうと思つた。彼女が壊れてしまったのだとしても、いや、だとしたら、ならばこそ。なぜなら彼女は娘の親しい友人であつたから。そして何もかも失つた私は、何かに縋りたかつた。だから、彼女を守り、どこかで静かに暮らそうと思つた。

「・・・分かった、共に行こう、私が君を守る。エ・・・」
「そいつは死んだ。お前の娘と一緒に。姉や母と一緒に。この村の死と共に私は生まれ
た。私の名は、アポリヨンだ」

誰もいなくなった村で、冷え切った声がそう宣言した。

第二章・ヴァイキング／第一話〈一守るべきもの〉

—守るべきもの—

障子が陽光を弱めている。まだ新しい畳は、特有の香りを漂わせていた。奥に伸びる室内の最奥は一段高くなり、天井からは御簾が下がる。御簾の向こう側に人の気配はない。その上段の方向を空け、弧を描くように私を含めた五人の大名が一定の距離を保ち向き合うように座っていた。誰もが絹衣のみを身に纏い徒手である。御所と帝の守りを担う近衛兵以外はこの場所に帯刀して入る事はできぬからだ。部屋の四隅に控える近衛兵は、全員、顔を面で覆い沈黙している。

この国は帝の下、五人の大名により分割統治されている。そして国の意思決定会議を御前会議と呼ぶが、帝自らが参加することは稀なため俗に五大名評議と呼ばれる。一人の侍を発端にした問題は、今回の五大名評議にまでもつれこんでいた。

「死罪、それ以外には無い。斬首の後、首を晒す」

評議の始まりと共に、問題の渦中に居る大名、鬼山が告げる。誰かが賛同を示す前に、私は問題を掘り起こす。

「討たれた鬼山殿の家臣は、領民から過剰な搾取を重ねておつたと聞いたが？」

鬼山が、私を睨む。

「私の知るところでは無い」

鬼山はそう言ったが、問題は、彼が家臣たちに対し、重税を課したことにあった。それを受けた鬼山の家臣たちは、鬼山に吸い上げられる税とは別に、自分たちの懐を潤すため民衆にさらに課税を行った。それにより発生した過剰な搾取が、問題の発端となったのだ。

「ほう、家臣の動きも知らぬとは、大名としていかがなものか？その素質を疑われかねますまい」

「小娘が」

鬼山が忌々し気に呟くが、それ以上の行動は起こさない。いや起こせないのだ。御所において力に訴えれば、それはすなわち罪となる。

「まあ、またれよ」

険悪な空気を読み、藍邪が口をはさむ。藍邪の序列は三位。近年鬼山との関係を深めているが、鬼山一強となる事も望んではない。恐らくはできるだけ現状を維持しようと考えているだろうが、意見は大名筆頭である鬼山寄りのものとなる。

「確かに亜由殿の言うように討たれた武家が、民衆を虐げていたことは事実」

それに不服を表そうとした鬼山を宥めるように藍邪が手振りし、続ける。

「されど、咎めなしでは済まされぬ事。主家に齒向かった侍をそのまま許してしまえば、世が乱れる元となりましょう」

味方を得たと思つた鬼山は頷く。

「ならばこそ死罪を」

そこへ、清十郎が横やりを入れる。清十郎は序列にすれば二位。鬼山や藍邪とは違い勢力は気にせず理によつて動く男だ。

「しかし、死罪に処し、その首を晒せば、民の反感を買うのも必定。もはや、城下においてもかの侍は英雄視されつつある」

清十郎の言うように、捕縛された侍は、圧政に苦しむ民衆を救つた英雄として噂となつていた。

「よつて侍として腹を切らせては？かの者に敬意を払い民衆を宥め、一方で力による権威の転換は認めぬと知らしめる」

清十郎の言葉に鬼山が反論する。

「腹を切らせるだど？馬鹿な、もとをただせば奴は侍では無い。どこの馬の骨とも知れぬ。そんなものに名誉を与えるなど」

その言葉に藍邪が過敏に反応する。

「あの者を見出したのは我だ。そしてそなたに請われ、与えた。我が目が曇つていたと

「？」

鬼山が僅かにたじろぐ、藍邪の過剰なまでの反応には理由があった。藍邪は、世継ぎを数年前に失っていた。血統の断絶を恐れた藍邪は、それよりも前に鬼山のところへ嫁にやっていた実娘の産んだ男児を後継者として引き取った。それは藍邪にとって苦肉の策であり、また鬼山は、その為の条件として藍邪が目をつけ拾っていた剣才に恵まれた少年を求めたのだ。それ自体は大した問題では無かったが、藍邪には家自体が、鬼山に乗っ取られるのではないかと言う疑念が生まれていた。鬼山の怒りから出た何気ない一言が、藍邪にとっては、自らが蔑ろにされているように思えたのだ。

「毒蛇殿はどう思われる？」

鬼山は、毒蛇に話を振る事で、藍邪との衝突を避けようとした。

「私は・・・」

毒蛇は、序列四位の大名であるが、その性質は小悪党と言ったところだ。故に、鬼山は毒蛇ならば自らに迎合すると思ったのだろう。今までそうだったように・・・だが、毒蛇は回答を躊躇っていた。鬼山と私を交互に見やっては、口を開こうとしては閉じる。藤清を使いに出したかいがあつた。やはり最強の侍。劍聖と呼ばれる藤清の影響力は絶大だ。毒蛇も、鬼山ほどではないにしろ、自らの私腹を肥やすために搾取を重ねていた。私は手紙でそれを丁寧に指摘してやったのだ。かの侍を死罪とすれば、毒蛇の民衆

もまた怒りを抱くだろうと……切腹を選んだとしても状況は変わらぬ。死して英雄となつた亡霊に取り付かれる事になる。今回は、鬼山の臣下が屠られたに過ぎないが、不満が蓄積すれば、民衆、侍、臣下、その何処が爆ぜたとしてもおかしくはないのだと。ならば次に首を落とされるのが毒蛇であつたとしても不思議ではない。そう脅し、分かり易い逃げ道も与えてやった。助命を毒蛇が持ち出し、今回の問題を真摯に受け止めているといふ事を表明、自らの責として臣下、及び領民への税を軽くすれば、毒蛇の統治者としての立場は安泰な物になるだろうと……その手紙を渡した藤清が、不機嫌だつたのも良い方向へ働いたことだろう。毒蛇は清藤が、自らに対し、怒りを覚えていると思つたに違いない。鬼山と敵対したくなく、だが、藤清に対する恐れと、民衆の怒りや、臣下の不満が自らに向かうのではないかという恐怖。毒蛇は保身の為。どう動けばいいのか苦悩していた。そして躊躇いながら口にする。

「私……私は、かの侍は……助命すべきではないかと」
「何?」

鬼山の言葉に毒蛇は身を震わせた

「た、確かに、鬼山殿の気持ちには、分かります。し、しかし死罪とすれば、清十郎殿の言うように、民の反感をかうでしょう。なれど、切腹とすれば、かの侍は英雄となつて影響力を持ち続ける。ならばこそ生かすことによって、収めたほうが良いのではないか、

と

毒蛇は何とか、そう言い切ると下を向いた。よく出来ました。と毒蛇を褒めてやりた
い。鬼山が苛立つ。

藍邪は回答を切腹とし、それにより

打ち首が1

切腹が2

助命が2

となった。頭数で言えば死罪が優勢。だが鬼山は切腹を承服できない。

意地がある限り鬼山と藍邪は歩み寄れず。迷いなき清十郎は動かず。そして、毒蛇は臆病さゆえに動けぬ。議論は、平行線におちいった。私ができるのは、ここまでだろう。後は、もう一つ蒔いておいた種が芽吹くかどうかだ。

室内に無意味な沈黙が満ちた頃。近衛大将である刀千が不意に姿を現した。大名の全員が、居住まいを正し、部屋の最奥へ向き直り平伏する。長い部屋の奥。御簾の向こう側で、静かにふすまが開けられる。小さく響くのは鈴の音。御簾の向こう側に現れた人影が座る。

「どのようなもめ事かと、帝が問うておられる」

左右に控えている女官の一人が、帝の声を聞き、伝えた。それを受け近衛兵が経緯を

説明、大名各々の意見をまとめて進言する。御簾の奥は沈黙。帝が、熟考を巡らせていた。誰も声を発さぬ。このような些事に、本来帝自らが赴くなどあり得ぬ事。それは帝が政治に無関心であるというわけでは無く、自らの言動により世が動き過ぎてしまわぬように考慮しているのだろう。少なくとも当代の帝には、その傾向を感じる。だが、今回は民衆の間に広めた噂が功を奏したようだ。帝を引き出す事に成功し、大名たちの間では意見が割れている。

後は帝の意思次第だった。

あの日、スヴェルンガルドが燃え落ちた日。私はステイガンドルと再会した。

長い部族間の抗争の果て、ヴァイキングは我が盟友グズムンドウルの下でまとまっていた。グズムンドウルは、まさしく首長と呼ぶにふさわしい人間であったが、自ら首長を称することは無かった。似合わぬからとそう言って笑った。理想の下、グズムンドウルと共に戦った日々はいまでも昨日の事のように思い出せる。それに伴う痛みも。

別れの時、グズムンドウルは私を引き留めたが、私は強引に袂を別った。彼の事を嫌いになったわけではない。ただ、生きる場所が違ふと感じていた。偉大な統治者の下に、いつまでも古臭いただの戦士が居座るべきではないと。盟友、戦友。呼び方はどうであれ、私たちは余りに強く結びついてしまっていた。彼は、ヴァイキングを統一した

後も私を対等に扱った。それは美德であり、グズムンドウルの理想ではあったが、事実上全部族の統治者となった者の姿ではない。私の存在で、実現した統一を壊したくはなかった。私はただ、斧を振るう事しか能の無い人間だ。もうグズムンドウルには必要が無い。それにグズムンドウルと共にいる事は、懐かしい日々と共に痛みを思い起こさせた。それはグズムンドウルにとっても同じだっただろう。だから山の奥にある小さな家で、静かに暮らしていた。アポリヨンと言う名の君主が軍勢を引き連れて、この地にやってくるまでは・・・

私がスヴェルンガルド要塞へとたどり着いたとき、アポリヨンの軍勢による攻撃が既に始まっていた。共に戦おうと言う私に、グズムンドウルは首を横に振った。それよりも頼みたいことがあると・・・。そして引き合わされたのがステイガンドルだった。

古の英雄。伝説の首長の血をひくステイガンドルは、長く続いた抗争の中で、親族を失っていた。それを庇護したのがグズムンドウルだ。ステイガンドルの才に気付いたグズムンドウルは、いつか自らの後をステイガンドルに、そしてヴァキング全ての族長の統治者である首長にと考えていた。グズムンドウルと共に戦場をかけたあの頃。ステイガンドルは、まだ少年だったが、今や青年へと成長していた。拘束されたステイガンドルは、グズムンドウルと共に戦うのだと喚んでいた。その気持ちは痛いほど良く分かったが、私には、グズムンドウルが何を求めているのか解った。

「お前にしか頼めぬ」

グズムンドウルはその言葉を聞き、私は頷いた。

ステイガンドルがいなければ、私はグズムンドウルと死を共にしただろう。もしも私がステイガンドルと同じぐらい若ければ、ステイガンドルの気持ちを受け入れ、その場にとどまっただろう。だが、幸か不幸か、私は歳をとっていた。抵抗しようとするステイガンドルを背負い、無理やり馬に乗せて脱出した。燃え上がるスヴェルンガルドに向け、ステイガンドルが絶叫していた。私は、青年の願いを打ち砕き死に場所を取り上げたのだ。かつて恨んだ大人たちのように成ってしまった自分を恨むのならば、どれだけでも恨まれよう。憎まれても、刃を向けられても構わない。だが絶対に盟友の願いを叶えるのだ。私は、齒を食いしぼり、ただ前を見据えていた。

椅子に座り、燃える暖炉の火を眺めながら義兄さんは口を開いた。

「ステイガンドル、いつか俺たちの時代が来る。その時は、共にヴァイキングの部族を束ねよう。俺が、お前を支える」

僕はすぐにそれを否定した。

「僕が義兄さんを支えますよ」

「俺は、父の様には成れぬ。お前の方が適任だ。お前は人を惹きつける」

「そんなことは」

「あるさ、だが、力は俺の方が強い。だから俺がお前の盾となり、剣となろう」

「いつか僕の方が強くなるかもしれないよ。そうしたら僕が、盾で剣です」

「そうか、果たしてそんな時が来るかな？」

義兄さんは、そう言つて笑つた。

僕も笑つた。輝かしい未来を夢見て……。

冬が訪れた。グズムンドウルによつてまとめられていた部族はバラバラになり、残された食糧を求め、殺し合つた。だが、その戦いから一年が経つころには、ヴァイキングに、二つの勢力が形成されつつあつた。ひとつは我ら、もう一つは、グズムンドウルによつて放逐されていたシヴ。混乱に乗じて、シヴは勢力を増し、もはや衝突は避けられぬものとなつていた。過去の亡霊が、痛みを伴つて再び現れたのだ。

「どうしても戦わなければならぬのですか？あの人と、それに……」

ステイガンドルがそう問うた。

「戦いは避けられん、グズムンドウルの死が、シヴを解き放ち。そして今や、その力のみならず恐怖によつて諸部族を支配しようとしている。奴に、任せるわけにはいかん。ヴァイキング諸部族を正しく一つにまとめるために。そのために皆お前についてきて

いるのだ。お前を新たな首長とするために」

私は後ろに続く軍勢を示したが、ステイガンドルの顔は晴れなかった。

「皆、あなたについてきていますのです。私には無い」

ステイガンドルは、寂しそうにそう言った。

それは事実だった。今はまだ。

だが同時に、ステイガンドルは気付いていなかった。ルナやヘルヴァーと言った若き力。彼らは私に敬意を払う。しかし、最も深くつながっているのは私とでは無い。ステイガンドルの人柄に彼らは付いてきているのだ。共に戦う盟友として、かつての、私とグズムンドウルのように・・・それにステイガンドルが気付くには、まだしばらくかかるだろう。こんな時、なんと言葉をかけたらいいか分からない。今のステイガンドルには、私のどんな言葉もむなしく響くだろう。グズムンドウルならば、何か気の利いたことを言えただろうか、迷ったが、なにか良い言葉が思い浮かぶことは無く、考える時間も残されてはいなかった。シヴの軍勢が、目前に迫っていた。戦場となるスカラボルグの丘は、左右を切り立った崖に挟まれ、広い丘の中央には亀裂が走り、深い谷となつて、丘を二つに分けていた。よって兵を二つに分けるしかなかった。シヴも同じように動くだろう。どちらかの均衡が崩れ突破されてしまえば、前後からの挟撃を受け敗北するしかない。私は丘の左側へ、ステイガンドルのいる本体を右側へ向かわせた。そして

我々とシヴの軍勢は、スカラボルグの丘で激突した。

「上手くいっただ」

待っていた大熊に、そう伝える。

「では、かの侍は」

「さすがに、御咎めなしとはいかぬが、無期限の禁固刑により命は救う事が出来た。帝のおかげだ」

「それは、よろしゅうございましたな」

大熊はそう言ったが、その顔色はそれほど明るくはない。

「あまり嬉しそうでは無いな」

大熊は迷いながらも口を開いた。

「藤清殿もやり口があまり気に召さぬと、そしてなによりも態々、他家を敵にまわすようなことをなさらずとも良かったのでは？それで得たのが娘一人では・・・」

「まあ、そういうな。紅葉はあれでなかなか腕がたつのだぞ」

「確かに、あの娘の腕は認めますが」

「それに今回の事は後々役に立つかもしれないし、なにより面白いと思わんか？」

私が笑って見せると、大熊は頭を抱えた。

「だとしたら、最悪です」

「まあ、あまり深刻に考えるな。私なりに考えて動いた結果だ」

大熊は不承不承と言うように頷く、理解できずとも信頼しているからこそ大熊は私に従っている。

「しかし、藤清殿が良く動いてくれましたな」

「ああ、あれはな」

思い出してにやける。

「賭け……いや取引をしたのだ」

言い換えたのに、さほど意味はない。実際には賭けだが、藤清は賭け事が嫌いだった。故に藤清には取引という言葉を使った。大熊には賭けと言っても良いが、周り周ってもしも藤清の耳に届けば気を悪くするだろうから取引という事にしておこうと思っただけだ。

「藤清と碁を打った。藤清が勝てば、藤清の望むように、裏から手をまわすことはせぬと。私が勝てば、私の思う通りに動き、それに藤清も協力すると、藤清は正攻法を好むからな。絡め手に弱い。常日頃は、勝たせてやるのがコツだ。勝利を五分よりも僅かに与えてやる。そうすると藤清は、碁での勝負は、公平か、むしろ自らに有利だと考える。そして自らに利がある勝負だと考える藤清は、そこに負い目を感じ、取引を飲みやすく

なる。そして、あの藤清だ。勝敗が決すれば約束を違えることは無い」

言い終えてから見やれば大熊は呆れていた。

「藤清殿が、貴方と相容れぬ理由が良く分かりますよ。しかし、そのような事、私に伝えるべきでは無かつたのでは？」

「まあ、聞けば、藤清は怒るだろうな。だからこれは、二人だけの秘密だ」

冗談めかして伝えたのだが、大熊は照れるどころか憂うような顔をしている。

「もしも、ばれたらばれたで、今度からは他の手に変えればいい。お前は何事も難しく考えすぎだ」

そう言つて、大熊の肩を叩いてやった。

「はあ」

大熊の口からは返事のような、ため息のような声が漏れた。

「レイダー！」

シヴが叫んでいた。斬りかかるこちらの兵士を、二つの片手斧で捌きながら。私の顔を見つければ、一直線に向かつてくる。私も前が出る。味方の側で戦えば、死傷者が増える。シヴがこちらに来ることは読んでいた。右側よりも僅かに狭いこちら側に、シヴは自らと選りすぐった兵たちを用い先手を打つことで、押し切ろうとするはずだと。だが想像

していたよりも、シヴの進攻が早い。目前でシヴが身をよじり跳躍。回転と共に繰り出される二本の斧の乱舞を避け、防ぎながら、私は大斧を振るう。その大振りの一撃をシヴは後方へ宙返りしながら躲した。相変わらず驚異的な身体能力だ。

「私は戻ったぞ、レイダー」

シヴが両手を大きく広げて嗤った。

「シヴ、我々の時代は終わった。ステイガンドルの下でヴァイキングを統一する。それが、グズムンドウルの願いだ」

私の言葉に、シヴの顔が歪む。

「グズムンドウルの願いだと？ 認めぬ。あの男は、私を裏切ったのだ。グズムンドウルの跡を継ぐのは、私、そして我が息子だ」

何も変わっていない。あの時のまま止まった世界をシヴは生きている。グズムンドウルが懸念していたことが、まさに現実となっていた。シヴは、かつての仲間だった。そして、グズムンドウルを愛していた。グズムンドウルもシヴを愛し、そして二人の間には、子供が生まれた。だが、グズムンドウルがステイガンドルを庇護しステイガンドルをいざれ首長にすると決めたとき二人の間には亀裂が生まれた。シヴは自らの息子を後継にと望んだ。グズムンドウルはシヴと何度も話し合いを設けたが、シヴが、ステイガンドルを暗殺しようとした事で問題の解決は不可能となった。グズムンドウル

は、シヴと息子を放逐した。息子まで放逐したのは、グズムンドウルが、ステイガンドルを後継にするという強い意志の表明だ。シヴを死罪では無く放逐にとどめた事について、グズムンドウルを責めるのは酷というものだ。シヴを殺すことなど、グズムンドウルにはできなかつた。共に戦つた私にも・・・だが、あの時、私がシヴを殺しておくべきだつたのかもしれない。グズムンドウルとその息子に憎まれたとしても。

だが、そうであつたなら今、私はステイガンドルと共に居られたらどうか？
世界はままならず。誰もが望む幸せな結末などありはしない。

「グズムンドウルは、お前の息子がステイガンドルの力になる事を望んでいた」
シヴに向かつて叫び返すも、無駄だと解っている。

返答は怒声と共に、振るわれた二本の斧。

かつて互いを守りあつた斧が、今は互いの命を奪おうとしている。手数のに押しされる。乱舞する刃が、防御しきれなかつた肩に触れ、肉を浅く削る。そのときシヴへ向かい斧が投げ込まれた。シヴが攻撃を停止。飛びのく。シヴを強敵と見たヘルヴァーが加勢に来ていた。

「ここはいい、ステイガンドルの下へ」

私がそう言うと、ヘルヴァーは、領き走り去っていく。シヴが、一人でいいのかと問うように啞うが、それでいい、私が、シヴを抑え、こちら側の前線を止める。それより

もステイガンドルが気がかりだった。

「久しいな、ステイガンドル」

本隊同士が、丘の上で向き合った時。私は、懐かしい声を聞いた。片手剣と円形の盾を構えたその男は、狼の毛皮を纏っていた。その姿は義父グズムンドウルを彷彿とさせた。見たことは無いが、若き日の義父は、あのような姿だった筈だ。

「・・・義兄さん」

「まだ、私を義兄と呼ぶか、ステイガンドル。もはや意味など無いというのに、さあ始めよう。私とお前、どちらがヴァイキングの首長となるか」

義兄は剣を構え、その背後に集う兵たちが、戦闘態勢をとる。

「義兄さん、私は、あなたとは・・・」

「ああああああああ」

義兄に伝えようとした言葉は、私の横から躍り出たルナの叫びによって掻き消された。ルナは槍を持ったまま突撃し、それが合図となった。両軍は前進し、義兄の姿も兵の中に消えた。戦いは始まってしまった。

激しい斧の乱打を受けながら、石突を突き出す。身をひねって、躲しながら薙がれた

斧の一撃は、身を低くすることで回避。同時に降り上げた大斧を、シヴが受け止めながら、その反動で宙を舞う、着地と同時に疾走。左右から迫る斧の柄を地面に突き立てた大斧の柄で受け止める。押し返すのと同時に、即座に大斧を振り下ろす。

上段からの一撃をシヴが左側へとステップを踏みながら、回転、反撃に移ろうとしていた。それが悲しかった。咄嗟の時に、左側へと回避するのが昔のシヴの癖だった。それが変わっていないなかった事と、それを狙っている自分が酷く悲しかった。シヴの動きに合わせて、軌道を変えた大斧の刃は、シヴの肩口へと突き立った。シヴの両手から、斧が落ちる。口から血を吐きながら、シヴが肩と突き立つ大斧の柄を握り私を睨んだ。

「お前と、ステイガンドルが死ねばよかったのだ。そうすれば、グズムンドウルは私と……」

言いかけたまま、シヴは息絶えた。

シヴは今でも、グズムンドウルを愛していたのだ。失われてしまった輝かしき日々が、私の身体に纏わりついているような気がした。あの時、こんな未来が待っているとは思ってもいなかった。私も、グズムンドウルもシヴも、だが結果として、グズムンドウルを助けられず、シヴを殺め、ただ私だけが生き残っていた。冷たい空気を吸い込み、ありったけの声で叫んだ。勝利を告げるために、戦いを終わらせるために、そして溢れそうになる涙のかわりに

「おおおおお」

崖の向こう側で、雄叫びが上がっていた。兵たちが叫び、シヴの軍勢を押し込んでいく。亀裂の向こう側の戦いに決着がついたのだ。それにこちらの兵たちも呼応する。勝敗は決していた。シヴの軍勢は降伏し、レイダーも私の下へやってきた。敵軍の将として義兄が私の前へと連れ出されていた。

「母は死んだか・・・」

「私が殺した」

「レイダーが、冷めた口調でそう答えると

「そうか」

と、跪いた義兄は言った。そして私を見上げた。

「ステイガンドル。こちらの兵たちを、お前の下に入れてもらえるか？」

私はそれに大きく頷いた。初めからそのつもりだった。ヴァイキングを一つにするための戦いなのだ。もう、戦う理由はない。なによりも、義兄を殺さずに済んだことが嬉しかった。

「わかった。感謝する」

義兄は微笑んで目を瞑った。

そして次の瞬間、兵の拘束を振りほどき、斧を奪い私に迫った。

グズムンドウルの息子が、斧を握っていた。私は府抜けていた。理想の実現を夢見てしまっていた。片手斧が振りかぶられる。私は斧を手に駆けだそうとする。間に合わない。

片手斧がステイガンドルの首に迫る。だが、その斧はステイガンドルの首に至る前に止まった。横から突き出されたルナの槍が、グズムンドウルの息子を貫いたのだ。ステイガンドルの横で倒れていくグズムンドウルの息子の口が、僅かに動いたように見えた。ステイガンドルは、ただ立ち尽くしていた。生まれたのは、激しい後悔。

私が担うべきだった。全ての憎しみは私が背負わねばならなかった。降伏した敵軍の兵へと、剣や斧が付きつけられる。

「やめろ！」

私は叫んでいた。自らの過ちに気付いても、打ちひしがれているわけにはいかない。「敵はヴァイキングでは無い筈だ。そなたらの統治者は死んだ。ステイガンドルの下に忠誠を誓え。ヴァイキングは再び一つになる」

斧や剣が戻され、降伏した敵兵が忠誠を誓う中、ステイガンドルは立ち去った。それを追いかけることが私にはできなかった。

近くの城に戻った兵たちは宴を始めていた。昨日まで殺し合っていたとしても、今や一つのヴァイキングだと……その声は、この部屋にまで聞こえてくる。部屋の扉が、乱暴に叩かれた。返事をする、ヘルヴァー姿を見せた。

「ああ、どうかしたのか？」

出来るだけ明るい声で問いかける。ヘルヴァーと言えども誤魔化されはしなかっただろうが……

ヘルヴァーは、少し迷うように言った。

「……あー、ルナがな。出ていこうとしている。俺には、何が正しいのか分からんが、止めるのなら……」

その言葉を、全て聞き終わる前に、私は部屋を飛び出した。廊下を走り、階段を下りた。歩いている酔っぱらったヴァイキングを押しつけて進む。城の厩舎に荷造りを終えたルナが居た。

「ルナ、私は……」

声をかけるとルナは手を止め、私の方をじつと見つめた。

それ以上、何も言葉にできないしていると、ルナが先に口を開いた。

「私は、ただ、あなたを首長にと思った。何も変わりませんよ。息子を後継者にと望んだ

シヴと：・統治者が二人いれば、いずれ争いが起きる。それをあの人は解っていた。だからあなたを殺そうとした。いやそのように見せた。でなければ、あの場所で動く必要はなかった。あの人は試したのです。あなたと、私たちを・・あの人が生きていけば、いつかあの人を担ぎ上げあなたと争う勢力ができてしまう。あの斧は、私が何もなくても、あなたを切り裂かなかつた。あなたにもそれが解っていた筈です。恐らくあの人は、自らが首長になる事など望んでいなかった。けれど、母親を見捨てる事もできなかつた・・。あなたはそれを聞いても、それでも、私を許せますか？あなたが敬愛する義父の息子を、あなたの義兄を私は殺した。あなたが救おうとした命を奪った。私が憎くはありませんか？」

そこまで言い切つて、ルナは沈黙した。私の答えを待っているのだ。何も答えなければ、ルナは私の下を去るだろう。

「私がやらねばならぬことだった。それをルナに担わせてしまった」

義兄といえども、いや義兄であつたからこそ。首長となるからには避けては通れぬ道だつた。それを、私は避けようとしてしまった。義兄は約束を果たそうとしたのだ。時と共に、叶わなくなつた約束を、形を変えてでも。その思いを私は裏切っていた。

へもう、俺の力は要らぬな？」

そう言つた義兄の最後の言葉を噛みしめる。あれは安堵だつた。私の周りに集つた

ルナや、ヘルヴァー、仲間たちを見て、自らの力はもう必要ないとそう言ったのだ。涙がとめどなく溢れた。幼き頃のように、もう一度義兄と話がしたかった。その叶わぬ夢を、ルナの言葉が断ち切った。

「では、あなたはどうしますか？そうして、いつまでも泣いているのですか？」

「……いや」

その通りだ。私は涙を拭いた。今生きている私にはやるべきことがある。沢山の死を生み、それでもなおお生きのこった私には……

「私は、首長となる。義父の、義兄の、レイダーや皆の思いにこたえるために、だからルナ……」

ルナは続けようとした私の言葉を遮った。

「ならば、泰然としていなさい。いついかなる時も、私が選択を誤ったと思わずに済むように……それまでは、共にいきましょう。……仕方がないですから」

ルナはそう言って微笑んだ。

ルナに見送られ、私は宴会場へと向かった。首長として、立たねばならなかった。

丘を越えると小さな農村が見えてくる。夕闇が迫る時間。家々からは炊事の煙が昇っている。草原を撫でる風が、土の匂いに混ぜて出来上がりつつある夕食の香りを運

んでくる。舗装されていない道を進むと木造の防壁と扉、その上に立つ櫓が見えた。

櫓の上から私を見つけた青年が、大きく手を振った。それに軽く手を振ると、青年の顔は、すぐに見えなくなった。そのまま門へ近づいていくと、櫓から降りてきた青年が門を開き駆け寄ってくる。

「おかえりなさい」

笑顔でそう言う青年に応えながら、私は馬を下りた。青年の目は輝いている。期待しているのだ。私が街から持ち帰る土産と、そして街の話を・・・

娯楽の少ない農村だ。外部から持ち込まれる話に皆飢えている。若い者は特にそうだ。彼らにとつては退屈だろうが、それも悪い事ではない。平和である事の証拠でもある。できれば、酒の席でも設けてやりたいところだが、それはまた後日にしたい。青年もそれを解っているから、自分から話を持ち出すことは無い。

まあ、明日にでもなれば、村中の人間が入れ代わり立ち代わりやってくるだろうが、それも悪い気はしない。

「大したものじゃないが、皆で分けてくれ」

そう言つて、城下で買った菓子や菓子を袋ごと渡した。

「ありがとうございます。ああ、馬は僕が厩舎に入れておきますよ」

青年は喜んで袋を受け取りながら言った。

「それじゃあ、頼む。水と飼葉を与えてやってくれ」

「任せてください」

胸を張って答えた青年と別れる。足取りは自然と軽くなる。村の中を歩く、目を瞑っていてもたどり着けるだろう。

夕涼みに出ていた村人に軽く挨拶をして、小道を進む。行く先には、見慣れた小さな家。村では、標準的な家屋だ。その扉の前に立ち金属の取っ手に手をかける。木製の扉の表面に付いた傷、そのなかには娘が付けたものもある。動物なのか人なのか良く分からない落書きだ。金属の取っ手は冷たいが、温かい扉だった。

「ただいま」

扉をあけながらそう言うと、娘が直ぐに飛び込んでくる。それをやさしく抱き留めて、そっと床に降ろす。毎回娘を受け止めるために、いつも荷物は一度、外におろしている。

「おかえりなさい」

台所で料理をしていたのだろう妻が、玄関までやってきて微笑んだ。帰る大まかな日には手紙で伝えられても、時間までは分からない。

だが、娘はいつも直ぐに駆けてくる。ずっと扉の方を見て待っているのだと、いつか妻から聞いた。どれほど寂しい思いをさせているだろう。二人に会えるのは、一年の内

でもそれほど多くは無い。戦が始まってしまえば、次がいつになるかもわからない。私
が城へ戻る日が近づくと、娘は口数が減って、少し拗ねたようになる。それでも出立の
朝、荷造りをしていると私の側にやってきては、私の身体に手を回し、涙を流しながら
鼻声で、自らの態度を謝る。そんな必要はないのに、謝らなければならぬのは、私の
方なのに、聞き訳が良いから駄々をこねたりはしない。それを不憫だと何度思っただろ
う。送り出してくれる村人たちの一番前で、妻と寄り添うように立つ娘はいつも姿が見
えなくなるまで必死に手を伸ばして振り続ける。帰ってきた夜は、一緒に眠った。それ
が、いつまでも続かないだろうことも解っている。子供はいつか、成長するものだ。煙
たがられる日も来るかもしれない。それを想うと少し悲しくなるが、悪い事ではない。
だが目を閉じる前にもう少し、先の事であってくれることを願った。

あくる日は晴れだった。

柔らかな風の吹く原で、私は遊んでいる娘たちを見ていた。妻の周りで、娘と、娘の
友達が、走り回っている。とても幸せな瞬間だった。娘は花を摘み、髪を飾ったり、花
冠を作ったりしていた。妻がこちらを見て微笑むと、娘が遊びの輪を抜けて一人でこち
らに走ってくる。

「お父さんにあげる。王様に貰った勲章みたいに立派じゃないけど」

その編み方が少し乱雑な花冠は、どんな職人にも作れず、この世で何よりも名誉ある

ものだった。

「ありがとう」

そう言つて笑うと、娘は花冠を私の頭に乘せた。それから

「あれ？」

と、首を傾げた。

どうやらそれは花冠では無く、首飾りだったらしい。そういえばさつき、娘は友達の首にそれをかけて頷いていた。私のサイズには小さすぎて花冠になつてしまつたのだ。

「ちよつとまつてて」

慌てた娘の姿が愛おしくて、抱き寄せた。娘は驚きの声を上げ、そしてそれは笑い声に変わる。頬を摺り寄せると、ヒゲが痛いと言いながら頬を小さな手が抓る。

それから、私は娘を見つめて真剣に言つた。

「お前を絶対に守る」

と、娘は喜んで頷いてくれると思つていた。

けれど、娘はこちらを真つすぐに見つめ返して言つたのだ。

「私だけじゃなくて、お母さんも、友達も、村のみんなも守つてくれなくちゃダメ」

娘は、怒つていた。それを見て私は自らの言動を恥じた。そしてそれ以上に、娘の優しさに心を打たれた。だから改めて約束した。

「みんなを守る、一人として見捨てはしない」

と・・・それを聞いて娘は笑った。その愛らしい頬を撫でようと伸ばした手は、何にも触れられずに空を切った。

まるで突然宙に投げ出されたような感覚と共に私は目覚めた。

長い夢だった。

実際に伸ばしていた手の先には、簡素な木の天井。窓から差し込むわずかな月明かりが、室内に差し込んでいる。夢の中で感じていた温かみは消え失せ、室内は冷え切っている。飛び上がるように体を起こす。全身からは嫌な汗が噴き出している。何も掴めなかつた手を震えるほど強く握りしめ、寝台へ打ち下ろそうとして止める。歯を噛みしめて必死に抑え込んだ。全ては無意味だと知りながらなお、生まれた激情は身中でのたうつ。幸せな夢は、目覚めた時の絶望を増幅させる。握りしめた拳がシーツに触れた時、気が付けば頬を涙が伝っていた。寝台の横に置かれたポール・アックスは、月明りを受けて、鈍く輝いている。

第二章・ヴァイキング／第二話へ―伝説―

―伝説―

海の上を、巨大な船が連なり、船団となつて進んでいた。雨の中、帆は風を受けて大きく膨らみ、我らを導いている。遠く、海を望む砦が見えた。明かりが点々と点っている。侍たちの砦だ。我らは海を越え、侍たちの領域。暁の国へと奇襲をしかけたのだ。理由は二つあった。ヴァイキングが統一されたことで、他のヴァイキング部族から略奪するという食糧調達手段が不可能となつた事。そして騎士達が、我らに備え強固な防衛線を構築していた事だ。ヴァイキングたちが、一人として飢えずに済むためには、食糧が必要であつた。そして騎士たちの国への進攻が不可能となれば、侍たちの国へ目を向けるしかなかつた。騎士達への恨みがあつたとしても、今は力を蓄えるためにより容易と思われる襲撃を選んだのだ。

「レイダー、あれを」

ステイガンドルが、砦を指さして叫んだ。砦の灯りが増えつつあつた。

「太鼓を鳴らせ」

指示と共に太鼓が打ち鳴らされる。奇襲が失敗したのなら、兵を鼓舞するべきだ。

天に灯るのは、放たれた数多の火矢。そして投石器から放たれる火球。横を行く船が打ち砕かれ、兵たちが海へ投げ出される。海岸線に並ぶ幾本もの杭が船の上陸を防ごうとしている。だが、我らは怯まない。ここに来てしまった以上。砦を落とし、食糧を奪い。そして帰る。生き残るにはそれしかなかった。

「ヴァイキングたちが暁の国へ向かったと」

「そうか」

私が北方の防衛線からの報告を伝えると、椅子に深く腰掛けたまま。アポリヨンが退屈そうに頷いた。

「では」

その部屋に集っていた騎士たちの一人が聞いた。

「我らも、暁の国へ向かう」

アポリヨンが立ち上がった。

「目標は？」

別の騎士が、聞いた。

「帝だ」

海岸線に乗り上げた船から攻め上がれば、侍たちが、我々の進攻に備えていたわけではない事が分かった。迎撃に現れた侍たちは、砦の規模としては十分な数だったが、我々の進攻に備えていたとしては余りに寡兵だった。だが、それは私の気を楽にするものではない。あの盛大な歓迎は、我々に備えていたわけでは無く、この砦の常時の防衛体制だったという事だ。それは同時に、この砦の兵が良く鍛錬され、有能な指揮官が存在する事を意味している。圧倒的な数の力で、我々は押ししていた。港にある砦らしく、制圧した倉庫にはたくさんのお糧や、交易品が保管されていたが、それを船に積み込み、このまま背を向けたとすれば間違いない追撃されるだろう。砦を落とすしかなかった。

こちらに幸運なことがあるとすれば、指揮官が有能であればあるほど、それを倒せば、指揮系統を一時的に混乱させることができるという事だ。侍たちは、砦の中に防衛線を幾重にも引いた。一つ破れば、侍たちは、波のように退き、新たな防衛線を出迎えた。被害を最小限に抑えながら、我らの進攻を妨げる。単純だが効果的だ。指揮官は我らを、この地に縛り、増援を待っているのだ。そうなれば、我らの立場は逆転する。この砦に進攻してから、既に三時間ほどが経過しているだろうか、だとすれば、残る時間はあと三時間。後三時間で潮が満ちる。干潮の時に乗り上げた船を満潮と同時に出航させる必要があった。略奪品を満載した重い船を海岸線から沖へと送るには、潮の力がどうしても必要なのだ。ステイガンドルに撤退の準備をさせながら、私は兵を連れ砦の

攻略を急いだ。侍達の防衛線を破り、奥へ。

そして、私は城内に設けられた広場、彼らの文化からすれば庭と呼ばれる空間に踏み込んでいた。降りしきる雨の中で、ただ一人の侍がそこに立っていた。赤く塗られた総面に、赤黒い大鎧の上から陣羽織を羽織った威容。その手が握るのは、あまりに長大な刀。野太刀と呼ばれるその刀を使いこなす侍は少ない。だが、私を知る野太刀は、目の前の侍が持つそれほど、異質なモノでは無かった。止める間もなく斬りかかった三人のヴァイキングが、その侍のただ一薙ぎで横へと飛ばされる。全員が絶命。傷口は、斬傷と言うよりも抉られている。切れ味の鋭い侍たちの刀ではあり得ぬ結果。そしてヴァイキングの男三人をまとめて薙ぎ飛ばす異常なまでの剛力。噂は遠くヴァルケンハイムにまで届いていたが、冗談だと思っていた。誇張された伝説に過ぎないと……。だが、目の前の光景を見てしまつては、もはや否定できない。侍最強の称号。劍聖と称される男。藤清だった。ならば手にした野太刀は、兜割り。20キロを超える大鎧を身に纏い、加えて通常の三倍の重量はあるだろうその野太刀を悠然と構えている。私は大斧を慎重に構え直した。そして、藤清がなぜこの場所にいたのかを理解した。藤清は己の得物が最大限の力を發揮できる開けたこの場所を選んだのだ。加えてこの場所の奥にある城門。そこから伸びる道は彼らの国の内陸へと向かっているのだろう。藤清は此処を最終防衛線としたのだ。我らはこの先に行くつもりはなかったが、藤清はそうは思

わないだろう。そして、背を向けたとして見逃してはくれない。この最強の侍を倒さねば、本国へ戻ることはできない。私の雄叫びと共に死闘が始まった。

振り降ろした大斧を、その野太刀は正面から受け止めて見せた。それが信じられない。侍の刀は強靱だが、ヴァイキングの大斧を正面から受け止められるほどではない。押し返され、追撃の一撃を辛うじて躲す。強い圧力を持った刀身が、横を通り抜けていく。ヴァイキングが重い鎧を纏わなかったことに感謝すべきかもしれない。その野太刀の前では、鎧など動きを制限するだけで何の意味もなさぬからだ。野太刀を引き戻している藤清に下からの大斧の斬り上げは、リーチを見切った藤清が回避し、踏み込んできた藤清の野太刀が上段から迫る。それを受けようと、大斧を構えつつも、首をひねった。藤清の上段斬りは中止され、突きへと移行。捻った首のすぐ横を刀身が抜ける。藤清の刀身が返され、首に突き立てられる前に、横に転がるように逃げる。藤清の上段斬りの構えが突きへの余力を残している事に気が付かなければ、頭部を貫かれていた。距離をとるための薙ぎ払いで、体勢を整え仕切り直す。持久戦に持ち込めば、重い具足を纏い、野太刀を振り回す藤清の方が消耗は激しい筈だ。だが、その一撃はあまりに重く、一度の判断ミスが死につながる。頬を汗が垂れる。

斧を構えながら、私は問うていた。

「お前ほどの男が、ただひとつの砦の指揮官に甘んじているなど。それほどの力を持つ

てすれば、聞き及ぶ大名に、いや帝にすらなれるはずだ」

それを聞いた藤清は構えを崩さぬまま笑った。

「我が力を持つてしてか？そこに何の意味がある？我は剣よ、ただ一太刀の、振るわずに済むのなら、そのほうが良い。それは民が安んじているという事だからだ」

「それならばなぜ、そこまで鍛え上げた」

「何故？そうさな。それもまた安寧の為。現にこうして振るう機会が来た」

その答えて気づく。この男はグズムンドウルと同じなのだ。支配者になれるだけの力を持ちながら。そうしようとはしない。アポリヨンとは違う、力をひけらかさず、それを御す為に己を律し続け。そして一生使わぬようにと願いながらもただ一筋にその技を磨き続けた男。

「お前とは別の形で、まみえたかったものだ」

気が付けば、そう口にしていた。純粹な称賛。しかし、手に握った凶器をもう下ろすことはできない。我々は、食糧を必要としていた。そしてこの砦の、兵の命を奪っていた。もしも、アポリヨンの襲撃の前に、この男と手を組めていたら、共にあの災厄に立ち向かえていたら・・・だが、そんな世界は無かった。そしてもうあり得ない。会話は終わっていた。私は大斧を構え直し、それに合わせ藤清の野太刀も動く。

飛び出すとともに、石突を前に突く。藤清が反応。大鎧を纏っているとは思えぬ反応

速度で横へステップ。回転と同時に放たれる薙ぎを、身を低くすることで回避。斜め上へと振り上げた大斧を、藤清の野太刀が受け止め押し返す。辛うじて拮抗させた力を、藤清は上へと流した。刀身の上を大斧が流れていく。藤清はそのまま前身。握った野太刀の柄頭がこちらへと向かつてくる。回避できない。そのまま押し倒され、背中を地面が打ち据える。揺れる頭を上げれば、藤清が大きく上段へ構え、今まさに振り下ろされる野太刀が見えた。大斧がその剣線を塞ぐ前に野太刀が迫る。

「おおおおおお」

叫び声と共に野太刀の前に剣が突き出され、一瞬だけ野太刀の進攻を留めた。剣はそのまま押し切られたが、それが稼ぎ出した一瞬が大斧の柄による防御を可能にする。野太刀を大斧の柄が受け止るも、藤清は強引に野太刀を押し込んできた。そこへもう一度剣が振るわれる。藤清は、攻撃を諦め後退。同時に放たれた野太刀による一線を受け止めようとした円形の盾ごとステイガンドルが飛ばされてゆく。立ち上がると同時に、藤清に特攻。藤清はステイガンドルへの追撃を中断し、大斧を受け止めた。

「何故来た。ステイガンドル。撤退の指揮を任せた筈だ」

藤清から距離をとりながら叫ぶ。

ステイガンドルが、剣と盾を構え直し、藤清の動きを警戒しながら答える。

「ルナとヘルヴァーに任せました。それよりも眼前の敵です。私が来なければあなたは

死んでいましたよ」

それには返す言葉が無い。

「それに、私は首長です。首長ならば最も難敵に当たらねばならない」

その言葉に自然と顔がほころぶ。

「ならばステイガンドルよ。共に伝説を倒すぞ」

その言葉と共に、私たちは斬りかかった。藤清は私の大斧を受け流し、同時に野太刀の剣筋をステイガンドルへの攻撃へと曲げる。ステイガンドルが腰を深く落とした姿勢で、野太刀の一撃を受け止め、剣圧で、数歩分滑るように後退させられる。私が放った石突の一撃を、藤清は身をひねりながら躲し、下段から斬り上げられようとする野太刀を、私の大斧がくい止める。そこへ跳びかかりながら突き出されたステイガンドルの盾を、藤清は肩からぶつかる事で逆に跳ね飛ばした。自由になった野太刀の突きを後退する事で避ける。私は大斧を構え、藤清を牽制。その間に、ステイガンドルが立ち上がる。二人がかりでも刃が届かない。だが、二人がかりだからこそ藤清の前に、まだ立てられる。藤清の構えが変わった。上段の構え。だが、今までの物とは違い野太刀の切先は完全に天を指している。悪寒がはしる。藤清は防御を捨てた。

「レイダー」

ステイガンドルが叫ぶ。若者故の無謀さと、首長と言う意地によって、ステイガン

ルは臆するどころか突っ込んでいた。それが、我らの命運を分ける。似ても似つかないその声が思い出を想起させる。あいつの盾に何度助けられたことか。返答のかわりに吠える。グズムンドウルの姿が、ステイガンドルに重なって見えた。大斧の柄を持つ手に力を込める。既に大斧は最大の引き。そこから動き出した大斧に遠心力が重ねられる。同時に放っていたら、必ず振り負けていた速度。だが、野太刀の前にはステイガンドルの盾が構えられている。まだ藤清の野太刀は最高速度に達していないにもかかわらず。強い衝撃音と共に、盾の表面を覆っている硬い檜の板が粉碎され、破片が細かな木屑となつて飛び散る。藤清の野太刀はそれにとどまらず、盾を囲っていた鋼鉄製の縁まで強引に叩き切った。刃はステイガンドルに到達する前に振り上げていた大斧の石突に接触。同時に大斧の刃が、藤清に突き立つ。ステイガンドルは衝撃で地面に叩きつけられ。石突が斬り飛ばされる。ステイガンドルの盾によって僅かに反らされた野太刀は、踏み出していた私の右足。小札鎧を切り裂き、腿を僅かに削って止まった。ステイガンドルの盾と、石突、小札鎧の防御に加え、大斧が与えた致命傷が、野太刀の進攻を辛うじて食い止めたのだ。もしもステイガンドルの盾によって、野太刀の剣線が、僅かに反れていなかったら、私の身体は深く切り裂かれていた。藤清の身体が揺らぐ。大斧の与えた傷口から大量の出血。倒れそうになる体を藤清は、野太刀を地面に突き立てる事によって強引に保持した。野太刀の一撃が大斧の石突を斬り飛ばしたことで、斧

の軌道がずれ、藤清は即死を免れていた。

「十年、いや五年前だったなら・・・な」

血を吐いた藤清は、そう言ってから自嘲気味に笑った。自らの言動を恥じるように、だが、それは負け惜しみなどでは無かった。私一人では死んでいた。ステイガンドルだけでも・・・そして、もし本当に五才、藤清が若ければ、二人とも死んでいただろう。偶然、時が我らに味方していた。藤清の身体はその死と共に、ゆっくりと倒れた。

アポリオンが、軍勢を率いて侍たちの治める暁の国へと進軍した後。

アッシュフェルドでは、その留守を狙って動乱がおこっていた。

ブラックストーンによって破られたいくつものリージョンの残党が、再起をはかったのだ。アッシュフェルドは混乱に包まれていた。ブラックストーンすら、いくつかに別れ権力争いをしていた。だが、これすら偶然ではないのだろう。アポリオンが望み、もたらした強き者だけが生き残れる世界。

そのなかで私は、未だに剣を振るっていた。もはや、何が敵なのかは分からなかった。友軍などいない。ただ、戦火に巻き込まれる村々を、弱き者を蛮行から守ろうと駆けまわった。自らの剣の正しさを問いながら、それに答えを出す時間は無く、ただ剣を振るっていた。

略奪品を満載した船団が、満ち潮によって沖へと向かう。

最後の一隻が、私たちを乗せる為に待っていた。仲間たちは誰もが櫂を持ち、漕ぎ出す時を待っている。ルナが槍を掲げ、舳い綱を握ったヘルヴァーが急かす。

船に向け、ステイガンドルと共に走っていた足を止めた。ステイガンドルの背が見える。いつのまにか大きくなった背が、数歩進み、私が立ち止まったのに気付いてステイガンドルは振り返った。

「なにをしているのですレイダー」

「見えるだろう？」

そう言って背後を示して見せる。砦から続く道の先、山の奥に沢山の灯が連なり、こちらに向かって動いていた。それは、侍たちの進軍の灯。星の輝きにも似た幾千もの兵。

「ですから」

ステイガンドルの言葉を遮って告げる。

「略奪品を満載した船足ではすぐに追いつかれてしまう。港に留められていた侍たちの船は燃やしたが、この規模の砦には、隠されている船もあるだろう。少しでもこの場でくい止める者が必要となる」

それを聞いたステイガンドルは即座に叫んだ。

「それがなぜ、あなたでなければならぬのです。貴方は誓った筈だ。私と共に在り、私を守ると」

その言葉が、どれだけ私の胸を打ったか。だが、私は表情を変えない。

「ああ、だがお前は、もう立派な首長となった。そして首長ならば、何が必要で、誰が適任か分かるはずだ。全部族の事を考え、情に流されることは無い」

ステイガンドルは口を噤む。言いたい言葉がどれだけあろうとも、それを口にすることは許されない。ステイガンドルはもはや自由な個人では無かった。ズルい宣告だ。だから謝罪のかわりに言葉を重ねる。

「お前は今やヴァイキング達の希望。私が教える事はもう何も無い。海を行くお前の船団が、私の誇りとなる。遠ざかる松明を、最後にこの目に焼きつけよう。・・・それに、この機会を逃せば、ヴァルハラへの門は閉ざされてしまう。そんなのはもう御免だ」

ステイガンドルは拳を握りしめた。沈黙は一瞬。噛みしめられていた口が開き、叫ぶ。

「ならば、ならばいずれ、ヴァルハラで」

ステイガンドルは、真つすぐに私の目を見て言った。その言葉に笑みがこぼれる。

「ああ、いつか共に戦うその時を楽しみに待とう」

ステイガンドルは強く頷き、そして背を向けた。ヘルヴァーが頭を下げ続き、權が波を叩く。ルナが槍を天に突き上げると、雄叫びと共に、戦太鼓が打ち鳴らされる。

ステイガンドルが振り返ることは無かった。それで良い。

港から発つ船団の灯りを見送って、未練を振り切るように背を向けた。その目に映るのは、集結しつつある侍たちの軍勢。多勢に無勢。だが、斧を握る手は、まるで若きあの頃のように感じる。過ちの多い人生だったが、少なくとも友と交わした最後の約束は果たせただろう。あの小さかった少年が、今や偉大な首長となったのだ。それを自分の力だけで成したなどと驕るつもりはない。

だがしかし、成長したステイガンドルが私の死を惜しんでくれた。いずれヴァルハラで会おうと、そう言われたのだ。これ以上幸せなことがあるだろうか？

迫りくる侍達へ向け踏み出した足は次第に疾走へと変わっていく、高揚とともに叫んだ。この大軍の向こうには、私よりも先にヴァルハラへ逝った仲間たちが待っている。グズムンドウルも、シヴも、二人の息子もいるだろう。シヴは私を恨んでいるかもしれないが、今度は、神の下で戦うのだ、きつと上手くやれるだろう。あの頃のように、肩を並べて

「思ったよりも手間取ったな」

丘の上に急遽作られた陣から、未だ火の手の上がる港を見つめ私はそう口にした。

吸い込んだ大気からは、湿っぽい潮と、焼けた木材、そして血の匂いが混ざっている。

「一人手強きヴァイキングがおりまして」

跪いたまだ若き伝令は恐縮しつつ答える。遠く海の向こうには、去つていく襲撃者たちの船灯りが小さく見えた。それを追う為に、隠されていた船に乗り込みつつあるのは、わざわざこの地まで乗り込んできた鬼山の軍勢だった。

同等の大名家でありながら、領域侵害であるその行為。藤清の死を知り、密かに動かしていた軍勢を送り出してきたのは、私が舐められている証拠だ。だが、そんな事は気にしない。むしろ今思うのは、この地を任せていた藤清の事であった。先代の頃からの重臣であり、武勇に名を馳せた藤清が、奇襲とはいえ討たれるとは、自らが家督を継いでから、藤清とは折り合いが良かったとは言えないが、少なくとも、あの男は裏切ろうとも、離れようともしなかった。実直な男であった。その剣筋と同じように・・・その死を、ただ悼んでいた。

「我らも急ぎ、追撃を」

その言葉に私は現実へと引き戻され、進言する家臣を見やる。

「追撃はせぬ。奴らはヴァイキング。海の民ぞ。下手な追撃は無駄な犠牲を生む。それに略奪を果たしたヴァイキング共が即座に再侵攻する可能性は低い。聞くところによ

れば、ヴァイキングの土地はアポリヨンに襲われ、食糧を焼かれたと・・・飢えているのだ」

「今回の襲撃もその為と？」

問うた家臣に頷いてみせる。むしろアポリヨン。そちらの方が気になっていた。

「申し上げます」

息を切らした伝令が、陣へと飛び込んでくる。

「何事か？」

家臣の一人が問う

「都が襲撃された模様」

「なんと？」

居並ぶ家臣軍の驚きの中、私は自らの疑念が、確信に変わった事を悟った。

「ヴァイキングの別動隊か？」

「いえ、軍勢と相対した者によれば、都を襲撃した者は騎士であると」

「ヴァイキングと騎士が手を結んだと？」

大熊が、顎を掻きながら訝し気に問う。

「いや、恐らく、これはヴァイキングと騎士たちの連動した軍事行動ではない」

静かに口を開いた私を家臣たちが見つめた。

「ヴァイキングたちの動きを陽動として使ったのだ。防衛線をさげ、陣地を再構築させる。他家が出しやばるなら、そやつらが防壁となろう。それよりも都だ。急ぎ都に取って返す」

歩き出す私に家臣たちが付き従う。

都は燃えていた。ヴァイキングたちの襲撃によつて手薄になった守りを打ち破るのは容易かつた。都にいた大名を殺し、私は御所へと踏み込んだ。

だが少し妙であつた。都もそうであつたが、御所の中にも、兵以外の姿が無い。まるで、あらかじめ襲撃を予想した民たちが、何処かへ逃げ去つた後の様だ。

それでも、私は奥へと進んだ。民が逃げ去つた後だとしても、侍たちが私の行く手に立ちはだかるのは、そこに守りたい何かがあるからだ。

帝。この国を統治する者。その者を殺せば、この国にも、その座を狙い戦乱が起ころうであろう。斬りかかつてきた侍を斬り伏せ、その身体を蹴り飛ばす。侍は、そのまま、木と紙でできた壁と一体となつたような扉を壊しながら倒れ、現れた部屋は、奥へ奥へと、続いている。そして、その途中に立ちはだかる様に一人の侍が立っていた。今まで剣を交えた侍達とは違う威圧感を感じる。装束も違い地味な黄土色の軽装鎧だ。そして、その顔は面で覆われている。黄土色の侍がゆつくりと刀を抜く。同時に私は身を伏せる。

頭上を、刃が通り抜ける。それに合わせて突き上げた剣が、襲撃者の身体を裂いて抜ける。抜刀の所作は、こちらの気を引くための陽動。斬り殺した襲撃者を確認する前に、投擲された何かが破裂。膨大な煙が発生、室内が白く染まる。煙球と呼ばれる目くらましだ。その煙の中から突き出され、突如として現れる刀を受け止める。

背後では、私に追隨してきていた騎士たちの悲鳴。晴れゆく煙とともに視界が戻ってくる。私と辛うじて生き残った騎士達の周囲を、先ほどまで前に立っていた黄土色の軽装鎧を纏った侍が何人にも増え、とり囲んでいた。増えた侍は、その全てが同時に動き、私たちに襲い掛かる。一人を斬り伏せるとその侍は死ぬ間際、再び煙球を投擲した。発生した煙と共に、先ほど殺した侍が三人増えて斬りかかってくる。

背後の騎士が屠られる。侍を一人倒した騎士の前で、再び煙球が炸裂。煙を振り払おうとする騎士の身体から三つの刀が生える。騎士は血を吐きながら絶命。

「馬鹿な。殺せば殺すだけ増えるというのか」

騎士達は困惑。思わず後退る。その騎士たちの後ろに白煙。その中から黄土色の侍達が襲撃。乱戦となる。斬り結ぶ間にも至る所で煙球が炸裂。同時に増え続ける黄土色の侍に、騎士たちの戦意が失われる。殺しても殺しても、同じ相手が再び数を増やし現れる。それはまるで悪夢だ。突き出される六つの切先を、大きく振った剣で撥ね退け。返す刃で、二人両断する。煙の中から再び突き出される十の切先を回避。煙が晴れ

れば、私の周りには、黄土色の侍の死体が散らばる。

「兇戯だ」

私は嗤う。

見た目をどれほど同じにしても、どれだけ同じ剣技を極めても、骨格や、内臓の個人差までは埋められない。侍を切り裂いた時に剣から伝わる微かな手ごたえの違いが、今までできり伏せた侍が全て別人だという事を示している。

「同じ格好をしているだけで、中身は別人だ。この国では影武者と言うのであろう？」

それに応えるのは刀身。だが、騎士達はそれを聞き、戦意を高める。一步前に出た騎士が突き出した剣に刺され黄土色の侍が絶命。騎士は笑うが、その顔に死んだ侍の身体から生えた刀身が突き刺さる。侍たちは戦い方を変えた。黄土色の侍は、自らの死を持って騎士の動きを止めたのだ。そこに、残る侍たちが殺到する。

「死を恐れぬというのか」

叫んだ騎士がいくつもの刀身によって剪断される。戦意を高めた騎士達が、再びじりじりと後退する。その戦い方は異常だ。追い込まれたヴァイキング達ですらこのような事はしなかった。黄土色の侍たちは仲間の死体を利用して殺しに来る。

狂気だ。狂気の沙汰だ。自然と私は笑っていた。

私が斬り殺した侍を越えて、斬りかかってきた侍の刀身を受ける。その剣圧に押され

る。それだけで解る。こいつだ。こいつが、この部隊の指揮官。

数多の影武者の中で隠れるでもなく、前線でもって私の命を取りに来ている。押される私に、周囲から侍たちが襲い掛かり、剣圧を横に流しながら回避するも、幾つかの刀身が私の身体に届き、血が跳ねる。

「貴様らが帝の守護者か、面白い。面白いぞ」

私に追隨してきていた騎士は、あらかた死んでいた。一步踏み出せば、数多の刀身がこちらに向けられる。

戦って戦って、戦って、そして私は膝をついていた。目の前には、数多の剣。ここで、私は死ぬのだろう。

贖う為。全力を尽くした。それでもなおこの小さな村ですら私には救えないのだ。どれだけ払っても戦火は収まらず、すぐに新しい火が点る。それでも神は手を差し出さぬ。地上でどれだけの血が流れたとしても……

賢王よ、私はあなたに託された事を果たすことができなかつた。私は頭を垂れ地面を見つめた。謝罪にもならぬとしても、私の心は、もうここには無い。何もかもが空っぽだった。

そこに影が差した。見上げれば、小さな身体が、視界を遮っている。鋭い剣群の向け

られる前で、数瞬後には訪れるだろう死を予期し震える体で、それでもなお、その細く白い腕はめいっばい広げられている。

戦いの前に、逃げるように言った村の少女だった。彼女が戻ってきてしまっていた。

叫ぶ親の手から逃れ、私を守ろうと無謀な勇氣でもって、だが、その無謀さが、震える小さな背こそが真に崇高な人の姿なのだ。神でも聖人の言葉でもなく、ただその少女の行動こそが、それでも、その崇高さは薄汚れた凶刃によって容易く踏みにしられる。神が、少女のような人間を死後に天国に招くとしても、人々や聖者が、少女を称えたとしても、今手を差し伸べその命を守ることができぬのならば何の意味があるというのだ。ならば私が護らねばならない。まだ地面に突き立てた剣は、折れてはいない。たとえ自ら汚した剣だとしても、少女のような存在を護るために未だこの剣は私のもとにある。膝に力を込め、立ち上がる。柄を握る手に力が戻ってくる。少女の肩にそつと触れて、引き戻す。その泥で汚れた顔に私は微笑みかける。それは兜の所為で見えなかっただろうか

「ありがとう」

そう言うと、少女の顔が少しだけ和らぐ、だが、それだけでは、その眼に浮かぶ不安を消してやることはできない。それでも構わなかった。

「おやおやおやおやおやお」

叫びながら踏み込んだ。一人を斬り伏せ。斬りかかってきた騎士を押し倒し、逆から切り込んできた剣を受け止め、払う。その先にいた騎士の首に剣を当て、首を斬り飛ばしながら、他の騎士の腕を斬り裂く。立ち上がるうとした騎士の首を刺し貫き、突きの体勢で走ってきた騎士にはその力を利用してこちらの剣を深く刺してやる。引き抜いた剣を持ち直し、別の騎士を柄で殴り倒し、膝をついた騎士を蹴り上げ前進する。倒れた騎士の頭部を踏み砕くと、騎士からはうめき声。騎士達は後退った。圧倒的数の有利があつても、私を殺すまでに振り撒かれる死を恐れている。だから、さらに踏み込む。恐怖に耐えられずに態勢の整わぬまま飛び出してきた騎士の斬撃を躲し、首を斬る。騎士たちは、次の動きを決めかねていた。私が剣を構え直すと側面から雄叫び。騎士たちがそれに反応する。私もそちらに注意を向けた。側面から押し寄せた騎士達が、私の前にいる騎士達を飲みこんでいく。剣と剣がぶつかり合う音。悲鳴や怒号。目の前で、騎士同士が殺し合っていた。新しい敵かと身構える私の前にやってきた騎士たちが背を向け、守護陣形を組んだ。私を守ろうとする彼らは、敵では無いようだった。

「ようやく見つけたぞ、ウォーデン」

状況が理解できず声の方を向くと、見知った騎士が立っていた。兜には鬮が括り付けられ、手にはフレイル。それはブラックストーンにいる筈のストーンだった。だが、その身に纏う鎧は、ブラックストーンに飲みこまれたアイアンリージョンの時の物だ。

「ストーンどうして?」

私の問いかけにストーンが笑う。

「お前を探していた、ウォーデン。お前を新たな君主とし、アツシユフェルドに平和をもたらすために」

ストーンの言葉は受け入れられない。

「私は、そのような存在では無い」

「いや、これはお前にしかできない。なにより俺達の望みだ。そしてホールデン・クロス
の望みでもある。俺達の為に、いや民の為に立つてくれ」

ストーンはそう言っただけで跪いた。戦闘を終えた騎士達が警戒態勢を保ったまま、私たちの方に注意を向けている。未だ理解が追いつかず茫然としている私に、ストーンが言った。

「お前が、自らを許せなくとも、俺達の誰もが汚れているとしても、お前が守りたいものの為には、兵が必要なはずだ。今まさにそうだったように」

私は黙った。少なくともその言葉を否定することはできなかった。

室内は、赤く染まっていた。

散らばる沢山の死体から流れ出た血が混ざりあう。床には剣や刀が突き立ち、或い

は、投げ出されている。扉を開けば、そこが最後の部屋だった。

その部屋の最奥。一段高くなった場所。細い植物で作られた天蓋の向こう側に人の気配がある。手を離れた扉には血が付着する。全身が血に塗れていた。

「お前が帝か？ 全て殺してきた。さあ、最後だ。私を愉ませろ」

血に塗れた剣を、人影へと向けた。その刃先から滴った血が、床に散る。一瞬部屋に訪れた静寂を破つたのは、静まり返った水面のような声であった。

「そうか、刀千が死んだか・・・」

その声は、ただ事実を淡々と述べていた。刀千というのが、あの黄土色の侍たちの名なのだろう

「もはや、我とそなたしかおらぬのなら。口を開いても良からう」

帝が言った。なんだかわからないが答える。

「そうだ、もう私と貴様しかおらん。貴様はどのような技を見せてくれる？」

「異国の騎士よ、そなたは勘違いをしている。そなたのような君主やヴァイキングたちの戴く首長のような武威に優れたる軍事的長。帝はそれらとは異なる。最も、神代の帝は、自らの武力によって国を治めていたようだが・・・いまや帝とは概念だ。民が望む限り存在する。私と言う個人はその依代のようなもの、その実在に意味は無い」

「なにが言いたい？」

私は、先ほどから全く動きだそうとしない。帝に腹立たしきを感じていた。

「そうであろうな。結局人は、育った文化により理解しあえぬ隔たりを抱く。それどころか同じ文化の下でも人は争う。もしも争いがこの世界から無くなるのなら、それは人から文化や思想が失われた時であろう。そしてそうならばもうそれは人とは呼べぬ」

「下らん時間稼ぎならば無駄だ」

私の恫喝にも、帝の口調は変わる事が無かった。

「ああ、すまぬな。そなたが剣を振るうのを愉しんでいるように、我は言葉を振るう事を愉しんでおるのやもしれぬ。そなたが来たこの僅かな時間にのみ私は、言葉の自由を得たのだから」

帝の声音に、僅かな喜びが混ざる。

「貴様を殺せば、この国は乱れる」

「ふむ、それもまた事実だ。私の存在に意味はないが、誰もが意味があると思っっているが故に意味が存在している」

「もうよい。戯言しか吐かぬなら、死ぬがいい」

宣告と共に私は疾走。振りかざした剣が植物でできた天蓋を切り裂いてゆく

「気の短き事よ。なんにせよ時間は稼げた。この国は未だ滅びぬし、文化も失われぬよ」

帝は最後にそう言った。私の剣が、その身体を斜めに両断する。切り裂かれ、床に垂

れた天蓋の向こう側。血だまりに倒れた帝の顔は奇妙な面によつて覆われていた。

その面に手を伸ばそうとして、名を呼ばれた。

振り返れば、ホールデン・クロスが立っている。

「侍の増援が来た。アツシユフェルドでは動乱が、今退かねば退路は断たれ、補給路が失われれば、包圍殲滅されるしかなくなる」

ホールデン・クロスが立つその奥にも火の手が上がっている。侍たちが仕込んでいたのだろう。御所は燃え上がりつつあった。

「そうか、ならば退こう。目的は達した」

私が歩き出すと、その後にホールデン・クロスが続いた。

今や全世界を戦火に巻き込むことができた。後はただ待つていればよかった。

解き放たれた狼たちが、私の要塞へやってくるのを。

騎士達が隊列を整えている。戦に向かうために

村は守られたが、住民の姿は無い。気が付けば、少女の姿も消えていた。仕方がない。怖れられることには慣れている。この戦乱の時代において彼らにとつてみれば、襲撃

者も我々も変わらないのだ。どんな感情を抱かれても構わない。ただ守ることができれば、それで良い。

ストーンと共に、進路を確認する。各所にある砦や、そこにある兵糧を確保しながらブラックストーン要塞へと向かう。私は、この動乱を収めながら進攻するつもりだった。時間はかかるだろうが、他のリージョンを飲みこみ。後顧の憂いを無くし、兵と兵糧を確保し、何より民の安全を確保する。そしてアポリオンを討つ。

それにストーンも賛同し、私たちの進路が決まった。

私が歩き出そうとした時。扉が開く音がして、軽い足音が聞こえた。見れば、先ほどの少女が走ってくる。沢山の騎士達に少し、おどおどしながら。少女は私の前に立つと、少しだけ躊躇ってから何かを差し出した。

「助けてくれて、ありがとう騎士様。でも、ごめんなさい。貴方にあげられるようなものは、こんなものしかないの」

少女が差し出していたのは、素朴な首飾りだった。少女は、それを取りに戻っていたのだろう。両親が、青ざめた顔で追いかけてきている。私は、兜を外して跪いた。

「とても素敵な物だ」

私がそう言って、その小さな手から首飾りを受け取ると、少女は嬉しそうに笑った。

それは、軽いものだったが、ずっと重く感じた

「君のおかげで、私は、もう一度立ち上がれる。君に誓うよ」

少女は良く分からなかっただろうが、それでも微笑みながら頷いて見せた。その微笑

みは、どんな聖句よりも尊い。だから、私はそれを守りたいと思う。犯した罪が許されることは無い。許しを請うつもりもない。だが、戦乱を終わらせなければならなかった。その為に、まだ血が流れるとしても。

第三章・侍／第一話へ――主家殺し――

――主家殺し――

石の転がる道を、必死で走っていた。履物は、いつの間にか失われ、地面を蹴る裸足は傷ついて、痛い。後ろを振り返りたい気持ちを抑えながら、ただ前だけを見て走っている。足には着物がまとわりつく。

後ろから聞こえる複数の軽い足音と、呼吸音が本気の疾走ではないと解っている。

追いつこうと思えば、すぐにでも追いつけるはずだ。そうしないのは、愉しんでいるからなのか、慎重に機会を待っているからなのか、私には分からないし、どうでもよかった。心臓が壊れそうなほど早く脈打ち、息苦しく、足はだんだんと重くなる。

村までたどり着けそうもない。背後から迫ってくるその恐ろしさに、涙と鼻水が垂れる。

くだらない事で、意地になって家を飛び出して、わざと地面を蹴って、強くなったよ
うな気になって、村からどんどん離れて、心細くなつて帰ろうと思った時。それが姿を
現した。それまで、私の中にあつた強さなんて、一瞬で吹き飛んでしまった。

私は強くなつてなつてないんだって、その時分かつた。ただ、怒つて勘違いしてただ

け、その結果、死ぬんだ。馬鹿だから・・・

そう思うと、涙が止まらなくて、謝りたくなつた。

ごめんなさいと言つたら、そしたらきつと、怒りながらも抱きしめてくれる胸に、もう一度飛び込みたいと思つた。

とにかくなんでも、誰でもいいから助けてほしかつた。神様でも仏様でも良かつた。いつもろくに祈つてもいないのに都合のいい話だけど・・・

心の中で願つた瞬間。爪先が石にあたり、そのまま身体が倒れていくのが分かつた。もう片方の足を出さなきゃいけないと思ひながらも転ぶことがはつきりと分かる。近づいてくる地面に、私をとつさに手をつけて、頭からぶつかる事は避けたけれど、勢いは無くせずそのまま転がつた。着物から出ていた右足が地面で擦れて、新しい痛みが生まれた。立ち上がらなきゃいけないと思ひながら立ち上がれなかつた。唸り声が大きくなる。もう駄目だと思ひながら、叫ぶ。今にも跳びかかってくるだろう獣を追い払おうと、何とか上体だけを起こして振り返つて無茶苦茶に手を振り回した。怖いから目を瞑つて、叫び続けながら・・・

地面をすべるような音と共に、ふいにその手が掴まれた。もう駄目だ。終わりだ。啞えられた。すぐにでも突き刺さってくるだろう牙を想像して身を固くした。

体が食いちぎられるだろう。何頭もの狼が、手足を引っ張つて、私の身体を裂き

ながら貪り食うのだ。

痛いのは嫌だな。私はただ、そう思った。

けれど、いつまでたつても、擦りむいた手足の痛み以外、新たな痛みがやってくることは無かった。手を啜えられた感覚も消えていた。

きつとさつき願ったから神様が仏様が、身体を引き千切られる痛みを取り除いてくれているんだろう。だから力を抜いた。狼たちの足音や、唸り声が響いているけれど、もうじき雲を割って、黄金の光と共に迎えが来るはずだ。

足の痛みも早く消してくれたらいいのにと思いながら

もしも生まれ変わったら、次はきつと良い子になりますとそう誓った。

いつの間にか辺りは静かになって、それでもまだお迎えが来なかったから私は願い事を重ねていた。

できれば、私のかわりに、お母さんに謝っておいてください。・・・やつぱり連れていく前に会わせてください。友達にも、あと早く足の痛みを消してください。

「・・・おこ」

私の願いを遮るようにすぐ近くで声がした。同時に、身体が揺さぶられる。

痛い。

想像していたのとは違う声だった。それに乱暴だ。もっと優しい方をお願いします。

そう願うと、それに怒ったのか、さらに揺さぶられる。

「おい」

渋々目を開けると、汚れた少年の顔が見えた。顔は知っているが、話したことは無かった。村では変わり者と言われている、近づきがたかったし。そんな顔が私の前にあるのを見て私は不思議に思った。会いたいと願った誰とも違ったから。

「……あなたも、死んだ、の？」

「……は？」

私の質問に少年が呆れたようにそう答えたから、私は怒らせてしまったかもしれないと思つて、目を逸らした。そしてその視線の先、少年の後ろに、何匹もの狼が倒れているのが分かった。少年の手には、何処から手に入れたのか知らないけれど、いつも彼が握っている古びた刀が握られていて、刀身は血で赤く染まっていた。気付けば軽く悲鳴を上げていて、同時に私がまだ生きている事と、少年が助けてくれたらしいことを理解した。そんな私を相変わらず呆れたように見つめながら少年は言った。

「……酷い顔だな」

私はそれに抗議したかったが、何も言えなかった。とにかく吃驚していて、血に塗れた刀を持つて立っている少年が怖くて……

そんな私を無視して少年は何かを探しているようだった。だが、目当ての物は無かつ

たらしい。

それから少年は私の着物を見た。私もつられて目を移せば、着物は泥だらけだった。少年は何かを考えている様子だった。私はとりあえず愛想よく笑ってみようとした。たぶん引きつっていたけど、感謝と友好を示そうと・・・

そんな私の努力の結晶を少年は見ることなく、私の顔は少年の着物の袖に覆われていた。止めようと手を出す間もなく息が苦しくなる。着物の袖は、そのまま私の顔を擦っていた。いや、違う。拭いているのだ。たぶん。酷く乱雑だけど。その着物の袖は、泥には汚れていなかったけれど、埃っぽかった。着物の袖が、私の顔から離れていくとき、私の鼻水が糸を引くように伸びた。私がそれを見た時。少年もそれを見ていた。私は凄く恥ずかしくなった。

「・・・どうせ明日にでも洗おうと思っていた」

少年はそう言った。それは少年にとっては気の利いた嘘だったのかもしれないが、全然そんなことは無く、私を救ってはくれなかった。けれども少年はそんな事は全く気にせず次への行動へと移っていた。

「立てるか？」

頷きながら私は、少年の差し出した手を掴んで立ち上がった。私が立ち上がると、少年はすぐに手を離し

「帰るぞ」

と言つて、着物で刀の血糊を拭くと、傷んだ鞆に納めて歩き出した。私も歩こうと、一歩踏み出し、地面を踏んだ瞬間。余りの痛さに足が止まった。数歩先まで言つていた少年は、私が付いてこないのを見て振り返つた。

「あ、その、ゆつくり行きますから、どうぞ先に」

そう、ゆつくりと歩けば、何とか我慢できるはずだ。少年はため息をついた後、そのままスタスタと戻つてきて、私の前に背を向けて少し屈んだ。たぶん乗れと言つているのだと思う。でもそんなのは恥の上塗りだ。なによりもはしたない。

「本当、自分で帰れますから」

「いいから早く乗れよ。喰われて死にたいのかお前は」

狼たちの唸り声が、また聞こえてくるような気がした。それは嫌だった。私が慌てて肩を掴むと、少年は、軽々と私を持ち上げ、歩き出した。その背に揺られているうちに私よりも少しだけ大きな背中から、温かさが伝わってくる。

私の冷えていた身体感覚がその熱によつて戻つてきたみたいだった。

「ふへへへ」

気が付けば笑つていた。

生きている事を今更実感して、それが嬉しくて

「・・・おかしくなつたか？」

少年が、怪訝そうに聞く。それからまだ少年にお礼を言っていないことを思い出した。

「ありがとう、その、助けてくれて」

私がそう言うのと少年は、小さな声で、頷くように返事をした。照れているのかもしれない。あんなに強くて、愛想も無いのにお礼を言われることになれていないのかも。そう思うとそれがなんだか可笑しくて、私はその身体に強く抱きついて、顔をうずめた。

「・・・おい・・・や、めろ。着物がまた汚れる」

少年は、一瞬だけ身を固くして言った。

その抗議を無視して私は、笑った。

「私は紅葉つていうの、あなたは？」

同じ村で暮らしていても、私は少年の名前を知らなかった。少年はそれにそつげなく答えた。それでも私は嬉しかった。日が暮れてゆく中で、私は身体に生まれた熱を吐き出すように少年に話しかけ続けた。返事はずつとそつげなかったけど。たぶんそういう性格なんだろう。そんなことをくり返しながら、近づいてくる村を見ていた。

それから、何かが変わったかと言えば、特に何も変わらなかった。村で出くわせば、会釈ぐらいはしたし、彼を見かけるたびに、気が付けば目で追っていたけれど。それ以上

は何もできなかった。あの時の熱はどこかへ消えてしまっていた。

私から話しかけるのは躊躇われたし、彼が話しかけてこないかなと思ったりもしたけれど。どちらにしても、褒められたことではない。

彼は相変わらず変わり者で、母は私が助けられたことに感謝こそしていたが、あまり関わりを持つてほしくないみたいだった。父は明らかに嫌っていた。

それを酷いとも思っただけれど、私が母を心配させてしまったのは事実だし。見かけるたびに何処かに傷をつくっている彼に近づいてほしくなかったのだと思う。だから私は、彼に悪いような気がしていても、結局何もできず。ただ前と変わらない日々が流れた。でも、ある日から、彼を見なくなつて、噂で、剣の腕をかわれ侍になつたと、そう聞いた。私はそれがまるで自分の事のように嬉しくて、でも、どこか寂しかった。私だけ取り残されたような気がして、あの温かい背には、もう触れられないのだと知つて：

開けた草原の先。小さな森の方向からこちらへ向かつてやってくる集団があつた。それは数頭の馬と、騎士たちからなる。小規模な軍勢だった。先頭で馬に乗る騎士は、豪華な鎧を身に纏っている。その後ろには、旗を持った騎士が続く。周りに従っているのは、大半がまだ若い騎士達だ。

彼らを警戒し、戦闘体勢へと移ろうとする騎士達を制止し、私は行軍を止めた。

見知った旗だった。

私は馬から降り、手綱をストーンに預けた。そして草原に佇み、騎士達がやって来るのを待った。騎士達はゆっくりと歩いてきて、私の数メートル前で足を止め、豪華な鎧を身に纏った騎士が、馬から降りることなく声を上げた。

「ウォーデン、再会を嬉しく思うぞ。それもこれだけの軍勢を用意しているとは、まさにお前は臣下の鏡よ」

その騎士。ハーヴィス・ドーベニーは親し気にそう言った。私は黙って、彼を見上げた。

「時が来た。いまやアポリヨンに対する不満は満ち満ちている。この機会に、正当な君主たる私が、騎士世界の覇者となる。さあ、我と共に……」

「ハーヴィス」

熱弁のさなか私がそう呼ぶと、ハーヴィスは驚いて沈黙した。敬称もつけずに名で呼ばれたことなど、一度もなかったからだ。

「貴様」

君主を冒瀆されたことに怒った若い騎士の一人が前へと踏み出し、剣を構えた。

その騎士は脅しのつもりだったのだろうが、私は一瞬で距離を詰め、振り上げた一撃で、その剣を宙へと巻き上げる。騎士は驚愕と共に、剣の行方を追い。宙を舞った剣は

ハーヴィスの乗る馬の目の前へと突き立った。

馬が驚きと共に嘶き、上体を起こしたことで、ハーヴィスはバランスを崩し落馬。草原を転がった。

若い騎士たちは動かない。剣を構える事を躊躇い。ハーヴィスの下へ駆け寄る事もできないでいる。私は、若い騎士を無視し倒れているハーヴィスへと向かう。倒れていたハーヴィスは此方を見上げ、私の一步に悲鳴を上げ、後退ろうとして腰を抜かした。そしてハーヴィスは腕を顔の前に翳し、身を守ろうとした。

「消えてくれ・・・頼む」

後退しようとして、足をバタつかせるハーヴィスを無視し私は踵を返した。途中、突き立った剣を引き抜き、呆然と立ち尽くしていた持ち主へ押し付けると、若き騎士は、思わずそれを受け取った。それで、終わりだった。

私は馬のところまで戻り、ストーンから手綱を受け取った。

「いいのか？」

ストーンがそう聞いた。

「ああ」

「甘いな」

「ただの愚か者を断罪できるほど、私の剣は清くはない」

馬に乗り、私が進軍を再開すると背後の騎士たちも歩き出した。もはや誰も、地にへたり込んだハーヴィスとその取り巻き立ちに興味を持つ者はいない。彼らは、茫然と私達を見送っていた。しばらくして振り返れば、長い行軍の列の向こう、未だそこから動かない騎士達が小さく見えた。

「できるならただの人として、そう生きればいい」

私は、誰にも聞こえないように呟いた。

此処に入れられてから、どれだけの月日がたったのかは分からない。壁につけていた印も、面倒になって止めてしまった。今日は、外が騒がしい。都の方だろうか？、だが都の端であるこの場所からは良く分からない。

不意に、人の走る音がした。その足音は、一直線にこちらへと向かってくる。そして俺の牢の前で止まった。見やれば牢番でも、給仕係でもない。鳥追笠の下の顔を面が隠し、軽装鎧の上に陣羽織、手には薙刀を持っている。装束から女だと解るが、今まで見たことが無い。女は一瞬俺を見て

「久方ぶりですね」

そう、安堵したように言った。

俺が、記憶を探っているうちに、女は牢の錠前を外していた。

牢が開かれる。

「さあ」

女はそう言うが俺は迷う。

「亜由様のめいです」

亜由は現五大名の一人だ。ならばこの女は亜由の配下なのだろう。だが、亜由にもその配下にも関わったことが無い。

「状況が理解できないのは分かりませんが、説明は追々。とりあえずここを出しましょう」

言われるがまま、牢を出ると、牢番が俺の具足と刀を持って待っていた。牢番は少し怯えている様子だ。一家殺しの罪人に得物を渡すのだ。当然そうなるだろう。だが、女が俺を恐れている様子は無かった。久しぶりに握った、愛刀の重みが懐かしい。

一度鞘から引き抜き刀身を見るが、傷んでいる様子はない。具足を身に纏いながら俺は女から都が襲撃された事。帝が弑されたことを聞いた。帝の守護者である刀千が代替わりし、新しい刀千が守護している次代の帝のために、亜由は元凶となったアポリヨンという騎士を討伐するつもりらしい。俺が牢に入っている間に、外の世界は大きく変わってしまったようだ。

「ところで、お前は誰なんだ？俺のことを知っているようだが」

それまで、此方の質問に流れるように言葉を紡いでいた女が、黙った。

「・・・覚えていませんか？」

その声は酷く悲しげに聞こえた。それに少ししたじろぐ

「すまないが、心当たりがない。面を外してもらえばあるいは・・・」

「紅葉です」

女は自分の胸に手を当てて名乗って見せた。

「紅葉？」

その名には聞き覚えがあつた。だが、人違いだろう。俺の知っている紅葉は、侍では無い。

「やはり、忘れてしまいましたか？」

紅葉はやはり悲しそうに言う。その声音に罪悪感を覚える。

「いや、その・・・」

「いいんです。昔の事ですから」

「俺は紅葉と言う名を、知っているが、あれは侍では無かつた。だから恐らく人違いをしているのだと思う」

俺がそう言うと

「ああ、それでなのですな」

と紅葉が明るい声をだした。

紅葉は納得したようだが、俺にはさっぱり意味が分からない。

「その紅葉ですよ」

哑然とする俺に紅葉は続けた

「私も侍になったのです。さあ、行きましょう」

紅葉はそう言うのと、俺に背を向けた。薙刀を持ち歩んでゆく姿は、様になっている。やはり俺の知らないうちに、世界はすっかり変わったらしい。あの、紅葉が薙刀を持ち、侍になっているとは、信じがたい事だらけだ。先に行く紅葉から調子のいい鼻歌が聞こえる。時間の流れにおいていかれた俺は、その後についていくしかなかった。

アポリヨンの、侍たちの都への侵攻。

それを聞いた私は、侍たちの追撃がぬるいものであったわけを理解した。同時にもたらされた情報によれば、アポリヨン不在となったアツシユフェルドでは内乱が起きているらしい。

私は、騎士領、アツシユフェルドへの侵攻を決定した。

侍達からの略奪により、食糧の問題はひとまず解決していたため攻め込まぬという選択肢もあった。だが、誰もが報復を望んでおり、その声を無視することはできなかつた。また私にもそれを望む思いはあつた。

アポリヨンの進攻によって引き起こされた戦乱で死んでいったレイダーや義兄、同胞たち、そして義父の為。さらには、これからの平穩の為。アポリヨンと敵対する勢力が乱立する今こそ、進攻すべき機会であった。

そして、アポリヨンと言う怨敵は、ヴァイキングの部族たちを、より強固に団結させた。

都が焼かれ帝が弑された今。都、そして帝を守ることでできなかった大名たちの権威は失墜している。もはや立場は等しかった。武功さえ上げることができのなら、その大名が新しい帝の下、政治を取り仕切るだろう。

アポリヨン襲撃の際に、最も都近くにいた大名、毒蛇が討たれていた。毒蛇の配下は指揮系統が混乱し、もはやまとともに動くことはできぬだろう。ブラックストーンを都から押し戻した清十郎は、引き換えに手傷を負い。アッシュフェルドへの進攻はままならなかった。

残る大名は三人。鬼山、藍蛇、そして私だ。目指すはアポリヨンの首。それが、この国の脅威を取り払う事。そしてこの国の実権を手に入れることであった。

「果たして来るでしょうか？」

隣に立つ大熊が聞く。

「さて、だが来てもらわねば困るな。藤清を失った今。一国を一人で落とした。奴の力が欲しい。そのために混乱に乗じて解放したのだから」

大熊の顔が曇る。捕らわれていた一人の男を開放するために、書状を偽造していた。五大名といえど、ただ一人の意思で罪人を解き放つことはできない。

「気にするな。武功さえ上げればなんとでもなる」

そう口にしても大熊の顔は晴れない。気苦勞の多い奴だ。私の所為だが・・・

「亜由様」

やってきた紅葉はいつもよりはずんだ声で、私を呼んだ。念願がかなったのだ。無理もない。紅葉の背後に一人の男。大熊が警戒し半歩前に出る。

「亜由だ」

私は男に名乗る。男は解っているという風な顔。

「紅葉が、どうしてあんなの下に居る？」

開口一番に男はそう言った。それに少し興味をひかれる。紅葉から聞いていた話とは少し違うようだ。だが、私はそれをつつく事はしなかった。それは私の悪い癖で、今はあまり適切とは言えない。だから私は素直に答えることにした。

「仕えたいと言ったのでな、元々は侍女にするつもりであったのだが、自ら薙刀を持ち戦いたいと、私も太刀を佩き戦に臨む手前、人並み以上の薙刀の腕を見せられては、断れ

なかつた。まあ、信頼のおける家臣が一人でも多く欲しかったことも理由ではあるのだが……」

紅葉が自らの薙刀の腕を褒められて照れているのが何となくわかる。男は無反応。

「そんな訳でそなたも家臣として迎えたい」

「俺を主家殺しと知っていてか？」

男は私を探るように言った。

「ああ、藤清が死んだ今アポリヨンと個において對抗しうる侍は、お前をおいておらぬだろう。今回の事で大名同士の権力争いが生ずる。誰もがアポリヨンの首を求め。毒蛇が死に、清十郎が動けぬ今、そこに加わるのは鬼山、藍蛇、私の三者だ。鬼山と藍蛇はほとんど変わらん。故に、アポリヨンを我らの手で殺し、その首を持ち帰る必要がある。その首を持つて他の大名共を黙らせる」

「まだ、殺せるかもわからぬのにその先を語るか。それにお前は独断で動いているな。俺を解き放つために帝はおろか、他の大名の許可すら得てしまい。混乱に乗じている。これはお前の立場を悪くすると思うが？」

私はその言葉に笑う。おおよそ想像していた通りだ。權威に媚びることは無く。ただ腕が経つだけの愚か者でもない。鬼山が実権を握る事を良しとは思っていないだろうが、私に加担していいかどうかを測っている。だが、大熊は気に入らなかつたようだ。

「先ほどから黙って聞いておれば亜由様に何というもの言い。五大名のひとりであられるぞ、もとをただせば貴様が今生きていられるのも」

「構わん」

苛立ちを見せた大熊を、私は黙らせた。私はこの男に恩を売りたいのではなく、それによつて支配したいのでもないのだ。重くなつた空気の中で紅葉は申し訳なさそうに大熊に頭を下げている。私は大熊に問うた。

「五大名と言えどもその末席、まして今やその権威は失墜している。そしてそれが無かつたとしてもその権威でもつて、私は人を従えようとは思わぬ。お前が私にしたがつているのは私が五大名であるからなのか？」

擲諭うように付け加えた言葉に、大熊がたじろぐ

「いえ、けしてそのような」

巨漢に似つかわしくないその様子は、何度見ても面白い。

「分かつておる。戲言だ。お前の忠、嬉しく思うぞ」

「はっ」

委縮しかけていた巨漢は、跳ねるような返事と共に深々と頭を垂れ、一步下がった。恐ろしい鬼の面をつけた巨体だが熊というよりは犬の様だといつも思う。

「さて、先ほどの続きだが、お前の言う事は正しい。だが、立場が悪くなるのはお前も同

じだ。私にもこの国にも、武功を立て私の行動を帝に追認させることが必要となる。どちらにせよアポリヨン討伐ができねば、我らの国は、外部からの脅威と内部の権力闘争で、下手をすると崩壊する。やらねばならぬ。それとも私が女であることが不服か？まあ、確かに世継ぎに為る男児不在による苦肉の策だ。よって家中の反発もあり信頼のおける者も少ないが、身軽でもある。お前は私をどう見る？」

「有能な女もいれば、無能な男もいる。その逆もだ。お前は、それなりに有能なのだろう。慕われているようだ。だが俺を本当に迎え入れるのか？その大男は気に入らぬようだが？」

大熊は沈黙しているが、鬼の面の下にある顔はしかめられているだろう。

「すまぬな。大熊は私の身を案じているのだ。だがお前を私の下に置くことにさほどの危険性は無い。私の推測によればな。お前は狂剣ではない。活かすも殺すも私の器次第。いや殺されるか？・・・そうであろう？私が、大名として相応しくないと感じたなら、いつでもこの首を取りに来るがいい」

男は少しだけ考えたようだった。

「いいだろう。とりあえずお前に従ってやる。さきの言葉、忘れるなよ？」

「ああ、よろしく、新しき我が家臣よ」

私がそう告げると、大熊が前に出た。男が大熊を見る。大熊も男を見ていた。

「……大熊だ」

大熊は不機嫌そうに名乗った。その様子に男は、僅かに笑い。

大熊は少し気を悪くしたようだった。

「紅葉、俺の助命を請うたな?」

アポリヨン討伐へ向かう行軍の最中。俺は、横を歩く紅葉に問いかけた。

「……ええ、ですが、侍でもない私には何もできませんでした。そこに手を差し伸べてくれたのが亜由様です。自らの立場を悪くしても、私の願いを聞き届けてくれた」

紅葉はそう答えたが、亜由はただ優しい人間ではない。何かしらの利害が無ければ動かなかった筈だ。

「それと引き換えに?」

俺の重ねた問いかけの意図を紅葉は察したのでろう。

「恩を感じていないとは言いません。ですが、これは私の意思です」

「なぜそこまでして、俺を助けた?」

紅葉の行動は無謀に過ぎる。下手をすると俺と共に紅葉も死んでいた。

「何故?」

紅葉がそう口にし、その後言葉が発せられるまで僅かな間があった。

「・・・そうですね。助けて、もらったからですよ」

考えるそぶりを見せた割には、単純な答えだった。

「あんなものは別に・・・」

そう言いかけた俺の言葉を紅葉が遮って言う。

「ともかく、貴方がいれば安心です」

紅葉はそれを信じて疑ってはいないようだった。それに少し困る。

それほどの信頼をもらは俺自身が持つていない。

「外に出るのは久しぶりだからな。もはや鈍っておるかもしれないぞ」

「それなら、今度は私が貴方を守ってあげます」

俺の言葉に、紅葉はそう言って笑った。

第三章・侍／第二話〈一狼達一〉

—狼達—

遠く、世界を両断するかのようにそそり立つ峰。それに張り付くように巨大な要塞が見える。ブラックスストーン要塞。都市機能をも備えたそれは我々の都に匹敵するほどの巨大要塞だった。ブラックスストーンの本拠地、アポリヨンの居城。

北からは既に、ヴァイキング達が攻撃を開始していた。遙か西方には、小さく騎士達の旗も見える。そこに私たちも向かう。要塞は三方から囲まれ、そして、混戦となるだろう。全ての勢力は、味方では無く敵対しているのだから・・・

斬りかかる騎士の甲手の隙間へと滑り込ませた刃が、その腕を跳ね飛ばす。絶叫を上げる騎士の首を刎ね、押し倒すように前進。機会を窺っていた別の騎士の胸部から心臓を刺し貫く。引き抜いた刀身で、突き出された片手剣を絡めとり、返す刀で切り裂こうとしたその暗殺者の首を、後方から差し出された薙刀が刎ねた。薙刀はそのまま弧を描き、横にいた騎士の胴体を裂く、同時に紅葉は前へと大きく踏み出し、騎士の体を蹴り飛ばす。そして流れるように後方へと突き出された薙刀の石突が、背後から迫る騎士の

顎を強打。紅葉は身体を廻し、斬り上げた刃で、騎士の腋の下から首筋までを切断した。紅葉が構えを解き、何かを問いかけるように此方を見る。

俺は構えを解かないまま言う。

「詰めが甘い。暗殺者を屠ったついでに斬撃は致命傷には程遠い」

一人の騎士が、まだ生きていた。蹴り飛ばされ、倒れていた騎士が立ち上がりとしたが痙攣し、再び倒れる。

「刀身には神経毒を、情報を得るためには生存者が必要でしょう？」

俺は黙って刀身を拭い、鞘に納めた。紅葉は確かに強かった。並みの相手ならば圧倒できるほどの腕だ。それを褒めはしなかったが……

俺達は既にいくつかの砦を落としていた。騎士達の統率は取れておらず、攻略は容易だった。おそらくブラックストーン要塞において、既に戦いが始まっているのだろう。

そんな中、こんなところに俺達がいるのには訳があった。亜由の軍勢は大名家とはいえ寡兵だ。正面からブラックストーン要塞を攻略する事は難しい。他の大名家と足並みをそろえれば可能であったが、そうすれば手柄は最大勢力である鬼山のものとなる。よって、ヴァイキング、騎士、侍の軍勢全てを利用する必要があった。全ての軍勢を陽動として使い、ブラックストーン要塞に侵入。誰よりも先にアポリヨンの首を取る。そこで亜由は本隊を二つに分けた。他の大名家と足並みをそろえる本隊と、アポリヨンの

首を取る為の攻撃部隊だ。

北からはヴァイキング、東からは侍。西からは騎士の軍勢がブラックストーン要塞へ向かっていると聞いていた。どの勢力もが避けた南側。それはブラックストーン要塞にあつて大軍で攻めるには向かない天然の要害となつてゐるからだ。

だが、だからこそ南方からの攻略を図つた。他を出し抜くにはそれしかない。ブラックストーン要塞ほどの巨大要塞には有るはずだ。脱出用の坑道が・・・

俺は紅葉と共にその道を探つていたが結果は芳しくない。

帰還した俺達を大熊が迎えた。

「首尾は？」

「捕虜が一人、だが、今回もあまり期待できないだろう」

今まで、砦を落とすついでに捉えた騎士どもを尋問したが、たいした情報は得られなかった。

「どうする。これ以上手間取るわけにはいかぬ」

大熊は苛立たしそくに言う。だが、妙案を思いつくわけではない。大熊は強い侍ではあつたが、策を練るといふ面ではからつきしであつた。だが、幸いなことに、自らそれを理解し、他者に意見を求めるだけの分別がある。俺の事は今でもあまり気に入らぬようだが、こうして今後の行動について話しあえていた。

「もう打つ手がないとなれば、急ぎ本体と合流し、正攻法で行くしかないな。亜由は何と？」

「亜由様だ」

大熊はいちいち訂正を入れるが俺は無視する。

「・・・城壁の外縁が落ちるまでは、まだしばらくかかるだろうと」

「三陣営の攻勢を受けても耐えるとは、流石に騎士世界最大の要塞ですね」

感心したような紅葉の声に大熊が釘をさす。

「感心している場合ではない」

紅葉は申し訳なさそうに口を噤んだ。

「まあ、三陣営が共闘しているわけではないからな。むしろ足を引っ張り合っているのが時間を稼ぎ出しているといったところか」

「確かに、そのように亜由様も書いておられたが、何故解る」

「敵の敵は味方と言うわけにはいかない。三者はお互いに憎み合っている。よって要塞への攻撃と合わせて、他陣営への攻撃と防衛が行われている筈だ」

大熊が唸っている中、放っていた斥候が駆け込んでくる。

「申し上げます。遠方に騎士の軍勢が現れました」

「ブラックストーンか？」

大熊が問う。

「旗は掲げられておらず不明」

「増援？それとも要塞が攻撃されている隙にこの砦を奪いに來た別の騎士勢力か？」

「兵数は？」

「確認できる限り、我らとほぼ同数」

「この砦を落とすには十分。援軍と称して奇襲をかければ、さらに容易ではあるが、一つの勢力としてみれば少ない。そしてそのような勢力が、混乱に乗じこの南方の地を抑える事にあまり意味はない」

「ならば？」

「恐らく騎士にも亜由と同じような事を考える者がいたのだろう。彼らに会おう。こちら側からの侵入経路を知っている筈だ」

ストーンに要塞への攻撃を任せ、私は選りすぐった騎士達と共に、要塞の南方に向かっていた。要塞の南方は天然の要害であった。だが道が無いわけではない。

ホールデン・クロスとマーシーがアポリオンを暗殺すると言ってきたが失敗した場合に備え、私たちはもう一つの手として、忘れ去られた脱出用の坑道から要塞内部へと侵入しようとしていた。ホールデン・クロスをどこまで信用していいのか、正直言つて未

だに迷っている。だが、これが毘だとして、我らとヴァイキング、そして侍を敵にまわしてなお、それを覆す手があるとも思えなかった。ならば、ホールデン・クロスは保身の為にアポリオンを裏切るか？。そう自らに問えば、否と感じる。ホールデン・クロスは、ハーヴィイスのような男ではない。

遠くに、砦が見え、私は思考を打ち切る。ブラックストーン要塞は、東西へ走る巨大な山脈を利用して作られた巨大な要塞都市だ。要塞は北を向いており、南は騎士世界最高峰が覆う。切り立つ崖のような峰故に要塞の南方は天然の要害であるが、同時に要塞側からの南方への視界を妨げていた。

しかし、一つだけ懸念があった。それがこの南方に位置する砦だ。古代の都市遺構を利用して作られたその砦は大きな砦ではないが、ここからは、峰へと至る原がすべて見通せてしまう。背後から奇襲を受けるか、狼煙を上げられてしまえば策そのものが頓挫しかねない。私たちはその前に、砦を強襲するつもりだった。

斥候によれば砦は静まり返っている。

要塞への攻撃で放棄されたのか、それを確かめるために砦へと近づく。古い遺跡の崩れかけた石柱が乱立する向こう側で、砦の門は開かれていた。

不意に人影が現れる。だが、騎士では無い。

騎士達が一齐に防御陣形をとる。防壁の上、石柱の後ろ、木々の間から、侍たちが姿

を見せた。見事な練度だ。我々に気付かれる事なく包囲している。彼らは待っていたのだろう。我々が来るのを・・・侍の数は、確認できるだけで、我々とほぼ同数。隠れているのならば、それ以上の数が存在する事になる。侍たちの包囲網の中から、最初に姿を見せた侍が、こちらへ向かって歩んでくる。

そして我々と、侍達とのちようど三分の二ほどの距離で立ち止まり声を上げる。

「敵対するつもりはない。少なくとも今は、・・・指揮官と話がしたい」

身構える騎士達を制しながら、私は前へと進んだ。侍が腰に差した刀の間合いの二歩、私の間合いの一步外側まで、それは、私にも敵対の意思はないという事を示す為であり、また侍特有の刀術に対応する為の距離。

侍は私を見て言った。

「簡潔にいこう。情報が欲しい」

「情報?」

「こちら側から、要塞へとつながる坑道。知っている筈だ。お前たちはその為にこの砦に来たのだろうか?」

私は考える。この侍に知らないというのは通じないだろう。我々の行動を推測している。そして、状況はこちらに不利。取り囲んだ侍たちは、我々への脅しであり、まさに喉元へ突き付けられた刃だ。目の前の侍に誠意があるとすれば、それは彼が、戦いが

始まれば、真つ先に死線となる場所にただ一人で立っているという事であろう。

だが、素直に情報を渡すわけにもいかない。いくつものリージョンの支配を受けて増改築を繰り返したブラックストーン要塞への侵入経路。歴代の君主が作つたいくつもの脱出用の坑道は、支配者の移り変わりと共に幾つかは忘れ去られ、幾つかは使えなくなつたが、まだ現存している物もあつた。ホールデン・クロスを通じマーシーがその情報をもたらした。要塞内部へ直接つながる通路。いかに要塞が難攻不落でも、内と外の両側から攻められれば、あつけなく落ちる。

「そちらに道を教えてしまえば、我らの策が成り立たなくなる可能性がある」
私は嘘を選ばなかつた。アポリオンが警戒してしまえば全て終わる。

「それに、これは騎士世界の不始末。我らが終わらせる。どうか退いて欲しい」
「それはできない。解つている筈だ。騎士よ。既に問題は騎士領を超えている。アポリオンが都へと侵攻し、帝を弑した以上。侍が退くことは無い」

それは解りきつていた。ヴァイキングとて退かぬだろう。

「始まつてしまつた戦争を早期に終結させるためには、一刻も早くアポリオンを殺す必要がある。全軍とまではいかぬとしても、退かせるのだ。アポリオンの死を持つて、故に道を教えよ」

「断ると言つたら??」

侍は黙って、刀の柄に手をかけた。

「戦うと?」

問いかげながら柄を握り直す。場が緊張する。

「目的は同じ。だが、もはや猶予がない。ならば刃で語ろう。他の者に手は出させぬ。俺とお前、勝ったほうがアポリヨンの討伐へ向かうのだ。理に適っているだろうか? アポリヨンを殺す為にはより強き者が相応しい」

「酷く単純な解決策だ。だが、彼の言うようにもはや時は無い。」

「・・・わかった」

私は後ろにいる騎士達に向かって叫ぶ

「聞いた通りだ。手を出すな」

「しかしそれでは」

騎士の一人が声を上げる。全てを言いはしなかったがその危惧は理解できる。だが、私の下に居るのは大半がアイアンリージョンの騎士達だ。彼らは私よりも、ストーンの方に近い。

「その時は、ストーンと合流し、その指示を受けろ。・・・侍よ、一つだけ誓え。私が勝つても、そなたが勝つても残った兵には手を出さぬと」

「ああ、侍の誇りにかけて誓おう」

侍は叫び、そしてゆっくりと刀を抜いた。私もそれに応じるように剣を構える。

「くぐぐ」

侍はそう言つて、一步を踏み出した。

「馬鹿な」

そう言つて、走り出そうとした紅葉の前に立ちふさがる。

「どいてください。彼は交渉をすと言つたのです。戦うなどとは」

「ならん。お前が動けば、全ての兵が動く」

「しかし」

食い下がる紅葉を跳ねつける

「戦闘が始まればそれがむしろ奴の命を危うくするぞ」

騎士達は、我々よりも、奴に近い場所にいる。いや、奴自身がそれを選んでいた。黙つた紅葉のかわりに、中央で誓い合う二人の声が響く。交渉を任せると言つたから任せると言つた。確かに言つた。だが、こんなことをするとは……。奴は侍の誇りにかけてと言つたのだ。奴が、それを大切にしているとは思えない。その言葉は、私に対する言葉だ。亜由様の配下の侍として恥じぬ行いをと考える。私の行動を制限するための……。それが何よりも忌々しい。

亜由様がどれだけ目をかけていようと、やはりあの者を好きになれない。

斬撃を受け止める。瞬時の跳躍が二歩分の距離を埋めた。

そのまま押し合いへと持ち込もうとする私の剣から、逃げるように刀身が戻っていくぶつかり合う相手を失った剣を、咄嗟に前へと跳ね上げる。

侍は身をひねるようにして僅か数ミリの差で剣を回避。私は空を切った剣を地面に突き立てる。地を這うような姿勢から放たれた薙ぎが私の剣に阻まれて、甲高い音を立てた。私は踏み出しながら突き立てた剣を持ち直し、斬り上げる。侍は大きく後退。さらに追撃をかけようと前に出た私に応じるのは、突き。

それは、かつて戦ったアデマーの突きよりもさらに速い。侍たちの使う、刀という独特な武器。その僅かに弧を描く細身かつ軽量の刀身は、超高速の突きと斬撃を両立させる。身を低く下げ回避しながら、肩からぶつかっていく。

私のタツクルに合わせ、侍は、軽く肩をあてそのまま乗り越えるように回転。背後に回った侍の斬撃を予想して、そのまま、前方へと転がる。風切り音を聞きながら、振り向きざまに剣を振るう。返された侍の刃と、私の剣が拮抗。押し合いへとは持ち込もうとせず、そのまま後退。引き戻していた剣を突きだす。

私の後退に合わせ、前進していた侍は刀を掲げ、その突きの軌道を逸らす。そのまま

斬撃へ移ろうとする侍に、私は膝を突き出した。前進していた侍が超反応。腕で防御すると同時に、後方へ跳躍しようとするが、その身体を私の膝蹴りが捉える。

感触は軽い。蹴り足をそのまま前へと踏み出し、追撃。

侍は刀で受けるが、その態勢は万全ではない。さらに押し込んだ剣は、刀を押し切り、侍の頬を微かに切り裂く。僅かな血が、宙を舞い。その滴を切断しながら、強引に放たれた斬撃を剣で受ける。

後退し仕切り直しを図る侍を追い。剣を振り上げる。侍の後退と、私の前進はほぼ等間隔。侍は、構えを上段に移しながらさらに後退。私の斬り上げをギリギリで躲した。そしてその膝はたわめられている。ならば来る。

私は大きく振り抜くとみせかけて、強引に刃を返し右上部から斜めへ斬り下ろす。

斬撃を放つために前進する侍を確実に捉える剣線は空を切った。

大きく踏み出すと見せた行動はフェイント。剣が届く直前に侍は急静止し、構えは中段に変化。応じようとする剣先に重圧。剣が地面へと叩きつけられ停止。踏み出された侍の右足が剣の平を踏みつけ地面に固定したのだ。

咄嗟に剣を押し、侍を転倒させようとした私の喉元に切先が当てられる。首筋を汗が伝う。動くことができない。侍が、柄に添えた手を僅かにでも押し込めば、私は死ぬ。

僅かな膠着のあと、刀の切先はゆっくりと私の喉元から離れ、固定されていた剣が解

放される。侍は一步下がりに、私から目を逸らすことなく静かに刀を収めた。

辺りには静寂。私は、剣を下ろしたまま一步下がった。

勝敗は決していた。

「あれのどこが交渉だというのです？」

岩へと戻ると紅葉が詰め寄ってきた。表情は面で良く分からないが、なんとなく怒っているような気がする。

無茶をしたように思ったのだろう。釈明を試みる。

「他に手っ取り早く済ませる方法が無かった。しかし、あの騎士はなかなかやる。おかげで勘が取り戻せた」

「それは、良かったですね」

紅葉の声は怒りから呆れていると言った風が変わった。

「とにかく道は分かった。要塞へ向かうぞ」

大熊も不機嫌だ。

先ほどの宣言が気に入らなかったのだろう

だが、結果として、道が分かったのだから、良いと思うのだが

そう、労いの言葉一つあっても良いぐらいには・・・

「覚えているか？ブラックストーンの旗を上げた時の事を」

眼下で繰り広げられる戦いを見つめながら、アポリオンが口を開いた。

「結局、私の下に残ったのは、お前だけになってしまったなホールデン」

黙っている私に視線を移し、アポリオンは退屈そうに鼻を鳴らし、言葉をつづけた。

「今なお、私の下で戦う忠実な者達。だが、彼らは退屈だ。狼ならば牙を剥くべきなのだ。自らが頂点に立つために・・・そういう意味では私から離反した者。彼らが率いるリージョン。それこそが真に私に忠を尽くしているとも言える」

そう言つて薄く笑つたアポリオンに向け私は問うていた。

「戦い続け世界に戦乱を巻き起こした。これから何をする」

私の言葉に、アポリオンは興味をひかれたようだ。

「何を？目的など無い。教えてやりたくなくなるじゃないか、酷く美しいものがそこにある事を、命の本当の姿を、誰もが牙を剥き、そして、その血と死の上のみ命は輝く」

「お前は・・・やはり狂っている」

「何をいませう」

アポリオンの笑い声と共に背後からマーシーが跳びかかる。

その双剣が届くよりも前に、アポリオンが伸ばした手がその細い首を掴んで宙に固定

した。

厚い鎧の隙間、薄い肌の下に流れる血管を僅かに削る事さえできたのなら、アポリヨンは死ぬ。氣道を塞がれたマーシーが必死で毒の塗られた短剣を振るう。

しかしその前に、アポリヨンの鋭いナイフのような籠手の指先が細い首を易々と切り裂いた。短剣は鎧の上を滑り、マーシーの口から苦鳴が漏れる。噴き出す血を浴びながらもさらに強められた握力がマーシーの頸骨をへし折り、マーシーは絶命した。

「暗殺者」ときで私を殺せると思ったのか？なぜ、お前も同時に斬りかかってこなかった？」

アポリヨンは死んだマーシーから手を離しながら、こちらを見た。床に落ちたマーシーの身体が音を立てる。

「ホールデン・クロス。お前はいつも遅いのだ。いまさら何を躊躇っている。あれから、どれだけの村を見捨てた？私と、お前とで成したのだ。この世界にかつてない戦火をもたらしした。いつか平和が訪れるとも思っていたか？私の心が変わると？変えられるとでも？お前の娘は狼では無かった。哀れな羊だった。だから死んだ。私が見つけた時、既に死に向かっていた。アイツが最後に言った言葉を教えてやろう」

「・・・やめろ」

「刺されて、玩ばれて、痛みに涙を流しながら、失血によって遠ざかる意識の最後に言っ

た言葉は」

「やめろおとおお」

大きく振ったポール・アックスは、難なく受け止められた

嘲笑うようなアポリヨンの声に娘の声が重なる。

〈お父さん助けて……〉

息絶える娘の幻影が浮かんだ。私はこの娘を救ってやりたかった。あの日救えなかった娘の代わりに、その結果がこれだ。私は与えてしまったのだ。この娘に、世界を焼き尽くす機会を……あの日抱きしめた自分の娘に、今まで見捨ててきた村々の見たことも無い娘が重なったような気がした。誰もが助けを求めていた。そして、一人として救えなかった。血を流しながら、涙を浮かべ、必死に助けを求め娘たちを救う者は現れず。ただ、目から光を失った娘たちとそこから流れ出た血が世界を覆っていた。その幻影を振り払うように、ポール・アックスを振るう。そして死んだ娘を切り裂く、私に殺した。振り抜かれる途中で、アポリヨンの大剣がポール・アックスを受け止める。「いいぞ、ホールデン。ずっと待っていた。始めよう。狼たちが集うこの場所で、世界を輝きで満たすために、神を降ろすために」

引き戻したポール・アックスを、何度も繰り出す。その度に娘の腕が、首が飛ぶ。思いが溢れては、血に塗れていく。大剣とポール・アックスがぶつかり合う金属音と共に

に、娘の声が、笑みが、温もりが爆ぜる。零れそうになる涙で、視界が滲んでいく。

アポリヨンの背後に広がった草原で、娘がまっすぐにこちらを見つめながら言った。
〈私だけじゃなくて、お母さんも、友達も、村のみんなも守ってくれなくちゃダメ〉

一瞬動きが鈍った。振るわれた大剣を受け止めるが、押し切られる。その刃が、肩を深く刻む。その苦痛に呻き声が洩れた。

「この程度なのか？ ホールデン。ならば怒りすら生ぬるい」

アポリヨンの蹴りが、顎を揺らし、握っていたポール・アックスを取りこぼした。

視界が揺れている。こんなところに至ってまで、アポリヨンを殺すことを躊躇った。その凶悪な兜の下にある、醜悪な顔の、元の姿をいまになつても思い出す。それが、取り繕った姿だったのだとしても、化け物のような今が、本来の姿だったとしても

その横には、こちらを見て微笑む娘の幻影がまわりついている。楽しそうに駆けて行く二人のその幻影が、私を縛った。室内に溢れた娘達は、アポリヨンが引き起こす戦乱に泣いていた。アポリヨンの向こう側に立つ娘は、友達を殺さないでと懇願していた。どこにでも娘がいた。アポリヨンが引き起こした戦火に包まれた騎士の農村に、ヴァイキングの漁村に、侍の山村に、娘は、何度も死んだ。剣で刺され、火に巻かれ、ぶつかり合う兵士たちの間で、押しつぶされて死んだ。助けを求める声が怨嗟のように響き。そして、もう残っていない村のひと達を守つてと言う。だが、もうポール・アック

スは床に落ちてゐる。私は負けた。娘の願いを叶えてやれず。何度も娘を殺しながら、娘の言葉を守ろうとした。叶うならば、娘の口から答えを聞きたかった。

けれど、それももういい。答えを得られぬまま、死ぬ事が今は、救いに思える。

娘の為と言ひ、死を振り撒き続けた。間違いだらけの生の果て。けれど少なくとも私はもうこの先を見なくても済むのだ。私は娘のところへは行けぬだろう。娘は私を許してくれないだろう。それでも・・・

・・・もう疲れた。

アポリヨンの持つ大剣の鈍い輝きが、首の横に当てられる。

「ホールデン。お前も羊なのか？」

それは、酷く落胆したような問いだった。

「お前の娘と同じように・・・私の母や、姉のように」

いつものように冷たい声。それなのに何故かその声が哀しく聞こえた。

その醜悪な兜の暗い穴の向こうにいるいつかの少女が、ただ独り残されて途方に暮れたように・・・

それは私の感傷だったのかもしれない。だが、もしそれが、私の感傷でなかったとしても、私には救えない。

「・・・そうだ」

私は答えた。

「そうか」

アポリヨンのその言葉は、いつもと同じ、ただ冷たいだけのモノに感じられた。

そして私は、また娘を裏切った。彼女を見捨て、自分だけが救われるために、黒く汚れた天使は、その大剣を構え、私は目を瞑った。

雄叫びが聞こえた。荒々しい足音が、近づいてくる。私が目を開けると、アポリヨンは既に視線を移していた。部屋へ飛び込んできた。一人のヴァイキングへ

ヴァイキングは、再度の雄叫びと共に跳躍。同時に、二本の斧を振り回す。それを受け流しながらアポリヨンが後退。

「ハハハハハ、ヴァイキングか、思ったよりも早かったな。そうだ、こうでなければ」

ヴァイキングが、圧倒的な手数で、アポリヨンを押し込んでゆく、そして二人は部屋を抜けていく、私に興味を失ったように去っていくその姿に、声を上げていた。

「待つてくれ、私を、私を殺してくれ」

それに応えは無く、アポリヨンは、こちらを見る事もしなかった。誰もいない戦場の中に私は残された。自らの罪を清算する機会も、死と言う救いも与えられなかった。ただ、罰だけが下された。

坑道を抜けてみれば、そこは要塞の中ほどだった。

下方の至る所から煙が上がり、北の門は既に破られ、ヴァイキングたちが乗り込んできている。想定していたよりも事態は進行していた。このままアポリオンを指し、そして倒したとしてもヴァイキングたちに要塞を抑えられてしまつては本隊へと繋がる退路が閉ざされてしまう。

「東の門を開けにゆく必要があるな。どうする?」

大熊は長年の経験からそれを感じたのだろう。俺は大熊の言葉に頷く。

「俺がアポリオンの首を取りに行く。お前は門の確保を」

「解つた。ならば、どれだけか兵を割こう。といってもこの状況ではそれほどそちらに割く事もできぬが」

「構わない。多数の兵を連れていっても身動きがとりにくいだけだ。それにアポリオンは刀千を倒すほどの猛者だ。半端な腕では悪戯に死者を増やしかねない。一人か二人で良い。失敗した時は侍の軍勢でもって数で潰せ」

大熊は頷きながら、考え始める。

「それなら、私が」

そこへ紅葉が声を上げた。

「お前は・・・」

否定しようとする俺の言葉を遮って紅葉が言う。

「私の薙刀ならば、貴方の刀が苦手とする距離でも対応できます」

返す言葉が浮かばない。紅葉の言葉は正しい。そして紅葉は俺や大熊に及ばないまでも部隊の中では五指に入るほどの実力を持っている。適任だった。それなのになぜ迷うのか、女だから？それとも俺が紅葉に未だ幼き日の面影を見ているからだろうか？だが、なんにせよ深く考えている時間は無かった。

「・・・好きにしろ」

俺は何とも言えない引つかかりを無視してそう言った。

「はい。そうします」

はずむような声で紅葉が言い。走り出した俺の後に、続く。

「こちらを片付けてすぐに向かう」

大熊がそう叫んだが、状況から考えれば、それは難しいだろう。

階段を上がれば、ブラックストーンの騎士が迎え撃とうと飛び出してくる。俺の刃が騎士を切り刻み。その攻撃と攻撃の間を紅葉の薙刀が埋める。伏せるように下げた俺の背の上を、紅葉の薙刀が風切り音と共に抜けてゆく。弧を描く斬撃は前方の騎士をまとめて薙ぎ倒す。

引き戻される薙刀と入れ替わるように前進。現れた騎士を刺し貫いて、さらに前進す

る。俺と紅葉の刃によって騎士の血と肉が踊る。

気が付けば、俺は笑んでいた。いままで体感した事の無い高揚。軍勢の中で戦ったことは何度もあったが、これほどの一体感は何れなかった。紅葉の腕は良いが、腕だけならば、紅葉以上の者と刃を並べた事もある。だが、このような事はできなかった。紅葉は巧みなのだ。完璧に俺の動きに合わせてくる。

俺が欲しい場所に薙刀が差し出され、俺が攻撃にできれば、その邪魔にならぬように引き、次の攻撃と防御へ備えている。俺の刀が苦手とする距離や、多数の敵には、紅葉が大きく前へ踏み出し、薙刀の長さを生かした突きと広い範囲攻撃が繰り出される。それで倒せなかったとしても、紅葉が乱した敵陣には、俺の刀が容易に突き立ち貪る。もっと、もっと前へ。心臓は跳ね、心が身体を置き去りにするように進む。

紅葉が軽く笑う

「貴方とこのように刃を連ねることができるとは、あの頃は思いもしませんでした」
はずむようなその声。

「そうか」

「ええ、だから嬉しいです」

俺も笑う。

「ならば、これからは共に戦うのも良いだろう」

「はー」

紅葉は薙刀を繰り出しながら、思い切りよく答えた。

「私、もつと強くなりますから。貴方に負けないぐらい」

今でも十分に力に成っているが、それではまだ、納得できないのだろう。もしも、本当に、俺と並ぶほどの力を紅葉が手に入れたなら、その時は俺たちに敵う者など居なくなるだろう。藤清がたどり着いたその先の境地も夢ではない。

「・・・だから、私から目を逸らさないでくださいね」

「ああ」

紅葉が恥ずかしそうに付け加えた言葉に俺は笑いながら答えた。

階段を上がり、要塞の上層部へと踏み込む。既に先走ったヴァイキングが、ブラックストーンの前で騎士達と戦いを始めていた。その両者を強引に振り払うように突っ切る。

最上階へと続く議場の床でマーシーが息絶えていた。近くには、ポール・アックスが転がり、視線を動かすとホールデン・クロスが座り込んでいる。その身体には、深い傷だが、致命傷では無い。うつろな目が、こちらを見据えた。

「・・・ウォーデン、私を殺せ。私を」

譫言のように呟くホールデン・クロスを無視し、追隨してきていた騎士に手当てを命

じる。ホールデン・クロスに振り払われ、戸惑う騎士がこちらを窺う。

「死による逃避など許されない。お前を殺してなどやらん」

私の言葉を聞くとホールデン・クロスは項垂れた。自ら死ぬことができず。他者による救済を求める者を救う気はない。生に苦しみを抱いているのなら尚の事。その罪を受け続けねばならない。自らが振り撒いた血を、自らに突き立った刃を、その痛みを……。じきに開けさせに行つた西の門からストーン率いる本隊が此処に至るだろう。だから、私は前に向かう。

一時でも早く、この戦いを終わらせるために……

駆けあがつた先の部屋に黒い鎧を纏つた女が立っていた。

ゆつくりとこちらを向いた兜。開けられた無数の穴の向こうから、それがこちらを見ている事が分かる。全身を怖気がはした。こいつがアポリオンだ。それ以外にはあり得ない。そう理解する。俺は既に刀を構えている。それでも、その隙だらけに見える女に斬りかかることができない。

「侍か、お前は、あの侍達よりも強いのか？」

その冷たい声を聞き、横で紅葉が薙刀を構える。アポリオンの大剣の先には、既に息絶えたヴァイキングの身体がぶら下がっていた。女にして、恐るべき膂力。立っていた

バルコニーの縁でアポリヨンが大剣を傾けると突き刺さっていたヴァイキングが、重力に引かれて、遙か下方へと落ちてゆく。

「試してやろう」

そう言いながらアポリヨンが正対する。

床を蹴り、全力で斬りかかった俺の刀身を、アポリヨンが受け止める。その身体を揺るがすことすらできない。押し合いは拮抗。先ほどの高揚など、すっかり冷えている。俺はアポリヨンを侮っていた事を痛感した。

「大熊を呼びに行け」

機会を窺っていた紅葉にそう叫ぶ。

「私も共に」

「二人では危うい。大熊の力がある」

反論にそう叫び返ししながら、後方へ下がる。目の前を大剣が過ぎ去り。突き出した刀は受け止められる。

「いそげー！」

俺の言葉に。紅葉は躊躇いつつ。

「すぐ戻ります」

そう言つて、駆けていった。

「娘を逃がしたか、賢明な判断だな」

アポリオンが嗤う。俺は答えない。

紅葉と二人で挑めば、あるいは勝てるかもしれない。だが、危険すぎると俺の経験が訴えていた。大熊がそろえば勝てるだろうが、こちらは無傷とはいかぬだろう。特に力で一段劣る紅葉は、もつとも危うい。自らと互角、あるいはそれ以上の相手と戦う場合は、先ほどまでの様にはいかない。一瞬の遅れや迷い選択の誤りが死に直結する。俺は、相手の力を探るために、距離をとりながら刃を交えた。

一撃で決められぬと感じ、長期戦になる事を覚悟したなら。此方の手の内を晒さぬように相手の手の内を理解しなければならぬ。好む太刀筋や、癖。また刃を交えるうちに感じられるそれが、相手の詐術ではないかという事も……

一度退くと同時に、斬り降ろされる大剣を、回り込むように回避しながら、放った斬撃は引き戻された大剣が受け止める。押し返そうとするその力に抗う事なく後退。更に一步後退し、追撃の大剣をギリギリで躲しながら、一步前が出る。最上段からの斬り下ろし。アポリオンはそれを、後方へ跳躍する事で躲す。

そのまま、繰り出されるだろう大剣に合わせ、俺は斬り下ろしを中断。さらに一步踏み出して突きへと変化させる。アポリオンは回避。それを予測して、すぐに引き戻した突きを、最小限の動きで再び斬撃へ、振りかぶられていた大剣の力が最大になる前に刀

を合わせ押す。アポリヨンが押し返し、刃が止まる。圧倒的不利な体勢であっても、その剛力でアポリヨンは強引に帳尻を合わせてくる。

「アポリヨン！」

突然放たれたその叫びに、俺とアポリヨンは互いに距離をとった。

姿を見せたのはあの騎士と、それに従う四人の騎士。

「ウォーデン、やはり来たな。私が見込んだ通りだ」

ウォーデンと呼ばれた騎士が猛進。放たれる斬撃を、大剣が止める。ウォーデンに付き従っていた騎士達も前進。俺は後退し、様子を窺う。

「お前を殺し、戦いを終わらせる」

拮抗する刃を押しながら、口にされたウォーデンの言葉にアポリヨンが笑う。ウォーデンの左右へと周り込み放たれる騎士の剣。逃がさぬように、さらに押さえつけようとしたウォーデンの腹部へ、アポリヨンの右足が叩き込まれ。強引にウォーデンを引き離す。

僅かに速く迫っていた剣を弾きながら、大剣は弧を描く様の一閃。振り下ろしていた剣がアポリヨンに届く前に騎士の首が宙を舞う。倒れていく騎士の身体の後ろから、差し出された別の騎士の突きをアポリヨンが躲し、同時に放たれていた大剣の突きが、その騎士の腹部を刺し貫く、瞬時に引き抜かれた大剣の柄が、別の方向から迫っていた騎

士の剣を受け止め、アポリオンは強引に前進。その騎士の身体を引き寄せながら回転。ウォーデンと、剣を弾かれたのち態勢を取り戻し、再度剣を振り下ろそうとしていた騎士の前につかんだ騎士の身体を押し出す。

ウォーデンが、振り下ろそうとしていた剣を急停止。止まらなかった騎士の剣が、盾にされた騎士の首元から身体に深く突きささる。その傷が致命傷となり、斬られた騎士は、呻き声と共に血を噴出させながら倒れていく

仲間を屠ってしまった騎士が、悲痛な声を漏らし、慌てて後退しようとするが鎧に深く噛みこんだ刃は抜けず、倒れていく騎士の身体と共に転倒する。必死で立ち上がろうとする騎士の首を刎ねながら回転した大剣が、ウォーデンが突き出していた剣を受け止め、押しつける。追撃の上段斬りをウォーデンは転がるように回避。即座に立ち上がり構え直す。アポリオンのさらなる追撃を、ウォーデンが受け止め、剣が悲鳴を上げる。

剣を交えたまま、アポリオンが口を開く

「私を倒し戦いを終わらせると言ったな？だが、今や騎士、ヴァイキング、侍。誰もが憎み合い。殺し合っている。私を倒したとて、戦いは終わらない。私は燻っていた火を、ただ大きく育てただけだ。私が行動を起こさなかつたとしても、誰かが同じことをしただろう。平和とは、豊かさがもたらす一時の欺瞞に過ぎない。窮すれば殺し合う。一つのパンの為に、一滴の水の為に。それが変えようもない人の本性だからだ」

言葉とともにアポリヨンの剣圧は増し、ウォーデンが押されていく

「それでもなお、手を取りあおうと腕を伸ばす愚か者は、返答の刃によって淘汰されるだろう。膨大な死、嘆きと絶望の上へのみ人は生きています。生きるとはつまり・・・」

アポリヨンが、ウォーデンに語り掛けている途中で、俺は疾走。アポリヨンに向け、突きを放つ。

それを読んでいたアポリヨンは大きく後退。アポリヨンの剣圧から逃れたウォーデンが、驚きと共にこちらを見る。

「俺が欲しいのは、こいつの首だ。お前は要らんのだろうか？」

ウォーデン達騎士が欲しているのはアポリヨンの死だ。ならば、俺達の目的は両立できる。アポリヨンが周りの騎士を皆殺しにした今ならば共闘が可能となる。俺の声を聞き、意味を察したウォーデンが頷く。

「そうか、それもいいだろう」

アポリヨンが笑いながら前進する。

振るわれた大剣をウォーデンが受け、大きく後退する。その側面から、アポリヨンに向かって刀を突きだす。アポリヨンはそれに対応する。刀身は、大剣の表面を突きながら滑っていく。伸びきった俺の腕を切断しようとした大剣を、差し出されたウォーデンの剣が受け止め。俺は、身をひねりながら刀を薙ぐ。アポリヨンは、軽く後退し、回避。

振り下ろされるウォーデンの剣を受け止め、そのままいなした。

体勢を崩されたウォーデンが転倒。ウォーデンへの追撃を防ぐために繰り出した斬撃を大剣が受け止め。押し返される。立ち上がったウォーデンの背後からの振り上げを、軽く横へ移動する事で躲し、それを読んで放った俺の突きは、身体を僅かに下げる事で無効化された。即席の連携には限度がある。だが、これほどとは・・・

追撃の一閃を、大剣が受け止める。押し合い離れた刀が再び大剣とぶつかり合う。

押し合ったまま、首筋を狙って軌道変化させた刀身にアポリヨンが後退。離れたアポリヨンにウォーデンの剣は、すぐさま返され、アポリヨンの攻撃を防ぐ。叫び声と共に、押し込まれるウォーデンの剣を受けて、それを受け流すように移動したアポリヨンに突きを放とうとすると剣線を柱が塞ぐ、アポリヨンは戦いながら瞬時に計算している。二対一という不利を、立ち回りで補っているのだ。

ただ、剣が強いと言うだけでは無い。アポリヨンは、狡猾だ。

柱を回り込むように、放った俺の突きを、アポリヨンが避け。ウォーデンの追撃は身をひねりながら躲し、そのまま大剣の薙ぎ払いへと移る。踏み込んでいた俺とウォーデンが瞬時に刀身を防御へと変える。刀身を強い衝撃が襲い、身体が押され滑るように後退。俺はそのまま、一度距離を取り、ウォーデンは一步踏み出した。俺はアポリヨンの

背後に回り込もうと動く。

不意に視界の端にうつる影。室内へ攻城兵器の投石が直撃した。轟音と粉塵。室内は大きく揺さぶられ、誰もがその場で自らの身体を支える。その揺れが収まると同時に、動き出したウォーデンの頭上から天井が崩落。巻き込まれると見たアポリオンが大きく後退。真下にいたウォーデンだけが、状況の判断が遅れた。俺は疾走。ウォーデンの鎧を蹴り飛ばして後方へ跳躍。ウォーデンの姿が降り注ぐ瓦礫の向こう側へと消える。死んではいけないだろう。だが、崩落によつて出来上がった壁がウォーデンの復帰を阻む。

「存外甘いな」

襲い掛かる大剣を受け止めながら、崩落した瓦礫の坂を、上層へと後退する。

瓦礫が散乱し、ほぼ押しつぶされた部屋では、俺の機動力と速度が死ぬ。その場所に留まれば、アポリオンの剛剣は圧倒的有利になるにもかかわらず、迷う事なく俺を追ってくる。だが、それは無知だからではない。そのほうが愉しいとも思っているのだから。狂人だ。

アポリオンの大剣を避け、大きく後退。たどり着いたのは、要塞の屋上、尖塔は既に失われ、広い広場のようになっていた。坂の下からアポリオンがゆつくりと姿を現す。

「……が、最終局面だ」

今にも笑いだしそんな声で、アポリオンが告げる。俺は刀を構え直し、息を吐いた。ここで決まるのだ。どちらかの死が・・・

勢いよく踏み出し、放った上段からの斬撃は、陽動。下方から跳ね上がる刀身を、アポリオンの大剣が難なく受け止めて見せる。押し合いには応じず後退。俺を追って放たれる大剣を刀身で受け流す。刀身の表面を、悲鳴を上げながら大剣が滑っていく、俺はそのまま強引に前へ踏み出し斬りつける。刀身はアポリオンの甲冑を切り裂くも、最小限の振りによる斬撃では、甲冑相手に致命傷を与えられない。そのまま前へ抜け、立ち位置を入れ替え、振り向きざまに放った斬撃が一瞬拮抗する。アポリオンの剛力に押される刀身を引き戻す。大剣はそのまま振り切られ、生まれた隙に連撃の突きを放つ。アポリオンは一つ目を躲し、二つ目を大剣で絡めた。再び距離をとろうとする俺にアポリオンが急接近。絡められたままの刀身を大剣が巻き上げる。その動きに対応しようとした腕は僅かに間に合わない。刀が大きく弾かれ、宙を舞った。斬り返された大剣を強引に躲す。その動きを予想していたように、アポリオンが回し蹴りを放つ。後方への回避は間に合わない。徒手になった腕を、その足の前に構え防御。崩れた体勢では衝撃が殺しきれずそのまま弾き飛ばされる。頭部と四肢を守るために、身体を丸めた。身体を打つ高質の感覚と共に、視界が廻る。床を視認しつつ四肢で掴み、滑る身体を強引に止めた。アポリオンの蹴りを両腕で辛うじて防げたことで、内臓への損傷は感じられな

い。まだ戦える。だが、今追撃されれば終わる。俺の目は刀を求め。右前方。一步半のところ、それを見つけた。折れてはいない。

そのまま跳躍する。

視界の端にアポリヨンの大剣が迫るのが見える。

足りない。伸ばした身体が両断される光景が浮かぶ。

「破アツ」

叫び声と共にアポリヨンの側面から薙刀が突き出された。長いその柄を利用した。完全な奇襲。アポリヨンは大剣でそれを受ける間もなく、身体を捻ることで躲す。俺はそれを視界の端で捉えながら、刀の柄へと手を伸ばす。僅かな距離を異様に遠く感じる。紅葉の突きは、執拗にアポリヨンを追っていく、首の鎖帷子を弾き飛ばし、鎧の表面を削り、籠手の隙間に差し込まれ、膝鎧を切り裂いた。だが、それはアポリヨンの体にはまだ届いていない。体勢を立て直したアポリヨンの大剣を、紅葉は薙刀の柄で受け止めた。俺の腕が、ようやく刀の柄を握る。薙刀の柄が、悲鳴を上げる。

紅葉が辛うじて、大剣を押し戻し、上段からの突きを放とうとする。

脳裏にこの後の光景が浮かんだ。

「やめろー！」

叫ぶ前に床を蹴っている。だが伸ばした手は紅葉の背に届かない。前にある紅葉の

体を引き戻せない。紅葉の薙刀が、アポリヨンの体へ届く前に、アポリヨンの大剣が紅葉の身体を下から突き上げていた。紅葉の口から苦鳴が洩れる。

一瞬がまるで永遠のように伸びきった中、その華奢な体に突き立っていく大剣をなすすべもなく見つめていた。身体を突き抜けた切っ先から、飛び散った鮮血が宙を舞い。僅かに俺の顔に付着。時間の流れが急速に戻る。紅葉の心臓は、辛うじて両断されずにあつたが、突き立てられた大剣が必殺の一撃であると経験が理解させた。

心臓を外れているのが紅葉の苦痛を引き延ばすための故意である事も・・・

斬りかかった刀身を、紅葉の身体から強引に抜かれた大剣が迎えた。紅葉の身体からは、血しぶきが上がり、身体は硬質な石の床へと倒れていく。だが、もはやそれを振り向くことはしない。俺にできる事は無い。冷酷だと罵られようと。ただ、己の刀を振るう、いつもそうだったように。激情は不要だ。それは剣を鈍らせる。

ただ、冷ややかに、相手の死のみを目指して刀身を奔らせる。

目の前に見える背が、私から離れていく

あの日から必死で追いかけた。その背から受ける懐かしい安心感。

触れられそうだったその背が、今はまた遠くにあつて、敵わないと思う。でも、それが憧れた背で、それが前に在る事を望んだのに、気が付けばその背へと向かつて手を

伸ばしている。

心とは裏腹に、いや、本当は側に居て欲しい。そしてこの手を握ってしてもらいたい。私が死んでしまう瞬間まで……

そんな自分の不甲斐なさを笑う、駄目だな。ちっとも変わってない。

もう、笑みなど作れていないだろう、口からもれたのは、乾いた咳と、纏わりつくような血液だった。力は流れ続け、冷たさを感じる。

本当は、かつこよく助けてあげてあげたのに、そして彼にまた背負ってもらってなんなら私が背負ってあげても良い。彼はきつと嫌がる。だからなおのこと。

それから黙った彼に私は口を開くのだ。あの時は分からず、気付いてからも言わなかった言葉をのせて……

でも、それがもう叶わないことは分かっている。

零れそうになる涙を押し止める。あの時よりも成長した私を見てもらいたいから震える視界の中心に必死で彼を捉えながら願う、どうかもう少しだけ見ていられる、よう……に……

ぶつかり合った刃の向こう側で、アポリオンは、楽しそうに笑う。

「冷静だな。だが、それでこそ、私の前に立つに相応しい。ホールデン・クロスの迷いと

も、ウォーデンのしがらみとも、ヴァイキングたちの怨念とも。そして侍達の忠義とも違う。その自由な剣こそが何より相応しい。今、私たちは等しいのだ。ただ死を振り撒く剣、ただそれだけのモノ！」

アポリオンは、狂乱したように叫ぶ。

甲高い金属音を上げながら。剣と刀が重なる。アポリオンの大剣を受け流しながら、斬り返す。刀身は横へと移動したアポリオンの甲冑。紅葉が刻んだ裂け目をさらに深く裂いたが皮膚を浅く斬るにとどまる。アポリオンの血が僅かに散る。想定よりもはやい速度で戻ってきた大剣を躲す。具足の袖が斬り飛ばされる。

「くはっ、くははははは、嬉しい。嬉しいなあ侍」

アポリオンが笑っている。高速の剣技の応酬に、金属音が何度も響く。その度に、血の滴が飛ぶ。

「美しい。この音こそが、神の産声、そして断末魔だ」

狂人の言葉など無視する。応酬の最後、大きくくぶつかり合った刃は拮抗。拮抗したその刃を強く押し、同時に跳ねるように後退する。アポリオンは僅かに下がったが、隙と呼べるほどのものではない。即座に態勢を整え、大剣が動く、斬り上げられる大剣を躲しながら、さらに飛びのく。膝をたわめながら納刀。床を強く蹴り、前進しながら刀身を再び解き放つ。

鞘を捻り、放たれる劍線を斜め上に向かう斬撃へと変えた。鞘の中から切先まで抜いた刀身は、最速を伴って奔る。

対するアポリヨンは、大剣を大きく引き、そのまま突きへと移る。劍速は此方が上、なれど、アポリヨンの大剣をもはや躲すことはできない。

躲そうとすれば、首を飛ばす劍線が維持できない。そしてアポリヨンは、大剣を左手一本で維持すると、右腕を首の横に掲げた。

アポリヨンは右腕を捨てたのだ。その右腕に到達した刀身が、甲手ごと右腕を斬り飛ばし、そして稼ぎ出した一瞬で、アポリヨンは、身体を下げ俺の刀を回避した。敗北を悟るも同時に突き立つと思った大剣の感触は訪れなかった。疑問に思う間もないまま。俺は刃を返し、アポリヨンの首に振り下ろす。アポリヨンの首が胴から離れ宙を舞う寸前。

「ヤ、ルじゃないか」

確かに、そう女が笑うのを聞いた。

首は跳ね上がり、断面から吹いた血が兜を濡らした。アポリヨンの左手と、大剣は床に向かつて垂れていた。大剣を左手一本で支え切れなかったのではない。アポリヨンにはそれを可能にするだけの膂力があつた。最後の瞬間、アポリヨンは痙攣したように見えた。その症状は紅葉の薙刀を受け神経毒に侵された騎士とよく似ている。だが、紅

葉の刃はアポリオンには届いていなかった。鎧を削っただけだ。紅葉の神経毒は、血管にまで到達しなければ効果を発揮しない。

理由に気付いた俺の口からもれたのは、乾いた笑い声だった。

紅葉は薙刀を大剣とは合わせなかった。薙刀が破壊されるのを避けているのだと思っていたが違う。ただ、アポリオンの体に傷を負わせることだけを考え、そして俺が狙うであろう甲冑の隙間に神経毒の刃を刻んだ。自分では倒せないとしても、アポリオンの鎧に僅かに付着した毒を、俺の刀が血管まで押し込むのを見越して・・・

致命傷となったアポリオンの突きを紅葉は防ぐことができた。それをしなかったのは、薙刀の神経毒を、大剣に付着させないための。ただ、それだけの・・・

〈今度は私が貴方を守ってあげます〉

そう言って笑った紅葉の顔が浮かぶ。未だ続く戦場の喧噪を何処か遠くに感じる。

倒れた紅葉の周囲には、その身体から溢れた血が広がり、既に僅かな痙攣すら失われていた。歩み寄り、膝をついた。持ち上げた手首は脈を伝えてこない。俺は紅葉の上体を膝に乗せ、顔を覆っていた面を外した。

血に汚れた面の下には、幼き日の面影を残しながら成長した顔。

長い年月を経て、再び見つめたその顔は、あの時のように表情を変える事も口を開くことも無かった。籠手を捨てるように外し、その顔にかかった乱れ髪を指でそつと取り

払い、見開かれていた臉を下ろす。

潤んでいた紅葉の瞳から、一筋の涙が伝う。俺はそれに触れ、それから、指の背でその頬を撫でた。指先の熱は、すぐに奪われて消えてゆく。俺は、何度も口を開こうとして、そしてその度に迷った。

「・・・綺麗になった、な」

躊躇いの後。震える声が絞り出したのは、あの時と変わらず冴えない言葉だった。

要塞の最上へとたどり着いたとき。中央に広がる血だまりの中で、あの侍は死した女の身体を抱き上げていて、近くには、頭部を失ったアポリヨンの体が倒れていた。何があつたかは、聞かずともわかった。

反対側の階段から、侍たちの軍勢が現れる。率いるのは、鬼の面をつけた大男。

侍たちも、状況を理解し、そして刀を構えた。同時に、私の後ろにいる騎士達も剣を構えたのだろう。甲冑の鳴る音が聞こえる。大男が、侍の軍勢を止め。私が騎士達を抑える。向かい合い刃を向ける二つの軍勢の中心で、ただあの侍だけが、まるで別の世界にいるようだった。侍は、騎士はおろか味方の訪れにも顔を上げることは無かった。

鬼の面をつけた大男が口を開く

「すまぬ。軍勢を整えるのに手間取った。紅葉を引き留めることができなかつた」

それは、謝罪の言葉だった。それに応える声は、異様なほど静かな物だった。

「お前に非は無い。俺の力が足りなかっただけの事」

そして侍は片手をあげ、その指が、石煉瓦の先を示すように動く、その先にあるのはアポリヨンの首。

「目的の首だ。持っていけ」

侍の言葉に、大男が黙って頷きゆつくりと歩を進める。侍たちは、大男の移動に合わせこちらを用心深く伺う。前に出ようとすると騎士達を私は手で制止し続けた。私たちにとつて、その首は必要ではない。できる事ならばもう血は流したくはなかった。大男は首を拾い上げ、ゆつくりと後退しながら侍に聞いた。

「お前は？」

「・・・帰るさ」

何の感情もないような声がそれに答え、あの侍は自らの刀をゆつくりとした所作で、血糊を落とし鞆に納めた後。膝に乗せていた女の遺体を、丁寧に抱えながら立ち上がった。抱えられた腕からもれる女の頭部は、重力に引かれて垂れている。侍自身の血と、アポリヨンの血、そして女の体から流れた血で、鎧は赤く染まっていた。

我らに何の関心も示さず、躊躇なく踵を返したその侍を、侍の軍勢が、迎え入れる。

何人かの侍が、女の遺体を運ぶことを手伝おうとしたが、結局彼らが手を出すことは

なかつた。いや、できなかったのだろう。目の前に立つその姿に圧倒されたのだ。怒りを見せているわけでもなく、刀身が鞘へと納められていても、それでもなお、彼らはただ見ているしかなかった。彼らの誰もが、彼を畏れただろう。悠然と歩いていく彼に、我らが反応できなかったように、私は、声をかける事もできずただ立ち尽くしていた。侍たちの軍勢が立ち去るまで、ただそこに立っていた。

遠くに、未だ火の手の上がる要塞があつた。

君主のいなくなつた要塞で、戦いはまだ続いているのだろう。だが、もはやここまで、その音は聞こえない。ただ、俺は淡々と歩いている。

剣の才を見込まれて侍にまでなつて、主を殺して、ずいぶん遠くまで来たような気がする。静まり返つた世界で秋を感じさせる風が頬を撫でた。あの時もこんな風が吹いていて、背中には、あの時よりも重くなつた身体。落としてしまわないように身体に括つた紅葉は、あの時とは違い酷く冷たかつた。それにあの時は、もつと騒がしかつた。人と喋る事なんて滅多になかつたからうまく返せない俺を無視するように紅葉は話した。不意にその会話の一端を思い出す。

〈侍でもないのに、剣の腕なんて、とよく言われる〉

そうばやいた俺の言葉に

「へそうかな？ 私は凄いいしカッコいいと思うよ」

はずむような声で紅葉は言った。

「ああ、そうか」

気が付けば俺の足は止まっていた。

俺が剣の腕を磨いたのは、こんなところにまで来たのは・・・

口からは自嘲気味な笑みがこぼれる。

「ずいぶん、遠回りをしてしまった。・・・なあ、紅葉？」

その言葉は誰にも聞かれる事なく、ただ大気の中に溶けていった。気の利いた言葉は、今になっても何一つ浮かばない。けれど、もつと言葉にすればよかつたと思う。どれだけ気の利かない言葉でも、それが散々な結果を生んだとしても・・・

それは答えが得られなくなった今だからこそ思う。都合のいい話だ。

それでも、もしも今、返事が得られるのなら、きつと、陳腐な言葉を口にしただろう。

俺は紅葉をそつと背負い直して、そして止まっていた足を前へと踏み出した。

大熊が、アポリヨンの首を持って合流するのと同時に、私は撤退を開始した。

同時に、ウオーデン率いるアイアンリージョンが退き始めた。ヴァイキング達もアポリヨンの死を知れば、いずれ退くだろう。要塞では未だに抵抗を続けるブラックストー

ンの残党と、いくつかのリージョン。鬼山とそれと競うように前に出た藍蛇の軍勢達。未だ、状況を把握していないヴァイキングたちが争っていた。

私が、アポリオンの首と共に都へと帰還した事で、新しき帝が開いた御前会議において、大名の序列は大きく変化した。鬼山と藍蛇は、互いへの対抗意識から最後まではや無くなった武功に拘り、戦鬪を継続させた。結果その兵力を大きく消耗。加えて会議への遅参により、その序列は最下層まで落ちた。

騎士は、新しく誕生した君主、ウオーデンの下で秩序の回復に迫られる事となりヴァイキングは、新しい首長の下、崩壊してしまつた理想国家再建の為に力を尽くしているらしい。だが、元々大規模な気候変動によつてもたらされた不安定な世界にアポリオンによつて、振り撒かれた死と憎しみが加わつた事で、三つの勢力は、食糧や領土をめぐり、争い続ける事になった。

— e p i l o g u e —

生き残つたホールデン・クロスが、私達の下に加わることは無かつた。罪の意識を抱えながら、その生が終わる瞬間まで彷徨うのだろうとそう思う。幸せになる事も休むことも、彼は自らに許すことは無さそうだった。問い続けるつもりだとホールデン・クロスは言つたが、答えが与えられる事は無い。そんなものは存在しないからだ。

だが、引き留める事はしなかつた。

あの戦いから数年が経っても未だ小規模の戦いは続いていた。

その最中、我々は集った。

私は騎士世界の代表として、侍からは亜由が、ヴァイキングからはステイガンドルが……彼を見て思う。彼は知らないのかもしれない。私があの日彼らの要塞へと進攻し、グズムンドウルと対峙したことを、或いは知っていて、それでも何も言わないのかもしれない。今すぐにでもその前に頭を垂れ、私は謝罪したかった。彼が望むのなら、この命を投げ出してしまいたかった。だが、それが何になるというのだろうか。あの日、彼らの国に攻め込んだ事実が無くなるわけではない。死んだ者が戻ってくるわけでもない。ならばその謝罪は、結局私を救済するためのものでしかない。ホールデン・クロスが望んだように……そして私はそれを許さなかった。

いつか、騎士世界を継ぐ者が現れて、私の存在が不要になった時。私はどうするだろうか？ 彼が、私を殺すために私の前に立ったとしたら……確かなのは、私に突き立っている剣は、生きている限り傷口を抉り続ける事と、今は騎士世界の統治者として在らねばならぬ事だ。

夜の帳の下、赤く燃える火に照らされた小さな部屋で、我々は向かい合った。和平の為の会談。だが、これで世界に平和が訪れることは無いだろう。平和は理想だが、理想は何処まで行っても理想に過ぎない。百年さえも生きられぬ我々の行為は、百年を超え

た先までも左右し、アポリオンが死んでも、あの大战がもたらしたものは、未だこの世に生を受けぬ者達さえ巻き込むだろう。

「我らは和平の為に集った。だが結局のところは武力を保つしかない。それが争いを生むとしてもアポリオンのような暴力を何のためらいも無く振るう事が出来る存在に、対抗できるのは暴力だけだからだ」

亜由の言葉にステイガンドルが吐き捨てるように言う。

「皮肉だ」

まだ若いヴァイキングの首長は、理解していてもなお、それを口にせずにはいられないのだろう。しかし亜由の言う通り、言葉は意味を成さなかった。それがどれだけ皮肉でも。私は、ホールデン・クロスから、アポリオンの出自を聞いていた。アポリオンと言う存在自体が、時代が生んだ化け物であつて、もしも世界が、神話にあるような楽園であれば、アポリオンはただの女として一生を終えたかもしれない。だが世界はそのようにできていない。それはこれから変わらない。

「侍たちは、新しい帝の下で私がまとめよう。なれど、それも末端までは及ばず、欲を抱きし者が現れれば簡単に瓦解する。それは、騎士やヴァイキングとて同じはずだ」

亜由の言葉に、私は頷きステイガンドルが答える。

「我らのこの和平の意味も、いつまで繋げられるかは分からない。そしてそれができな

かったとき、再び戦乱が訪れると?」

「そうだ。拮抗する武力による抑止か、圧倒的武力による支配、どちらかによってしか平和という幻想は現れず。その幻想もまさしくうわべだけの幻想であるか一時の物ではない。恒久的な平和など人には築けない」

「ならば、憎しみ、剣を突き付けながら、それでも相手の存在を許容する。そんな平和をと?」

「ああ、我らが今、こうして話あえているのも、拮抗するだけの武力が有るからだ。その向かい合う槍袈の背後にだけ一時の安寧が生まれる」

亜由の言葉にステイガンドルが鼻を鳴らす。私は口を開く

「ならば剣を持って平和を」

結局それしかないのだ。

そして短い会談は終わった。

いつか忘れ去られ、記録にも残らない会談になるかもしれないが、それでも無意味ではなかった。そう思いたい。帰り際、私は亜由を呼び止めた。

「アポリオンを倒したあの侍は?」

亜由の護衛のなかにあの侍の姿は無かった。

「ああ、あいつか」

亜由は困ったように笑った。

「望めば、大名にもしてやれたのだがな。富も領土も要らぬと、今は、故郷の近くの庵を作り暮らしている。望むものに剣を教えながら……結局のところあいつにはそれしかないのだろう。不器用な奴だ」

亜由の言葉は夜風の中に消えていった。

「そうか」

私はそう言つて、亜由と別れた。その後ろを大男が歩む。

ただ一度、刃を交え、ただ一度共に戦つただけだったが、あの侍らしいと思つた。彼らに背を向け、ストーンの連れてきた馬に乗る。そして私は騎士領への道を進んだ。

世界から、争いが無くなることは無いだろう、神が樂園を下ろすことも。それでも、世界は続いていく、人の思いなど容易く押し流して、静かな夜には、そこでどれだけ血が流れたのかも知らぬ虫たちの音が響き、空には、膨大な数の星が瞬く、人の命が、その中の、目に見えないほど小さき星のくだらない輝きに等しいのだとしても、私は、祈る。もはや神などにはではなく、今を生きている人と、これから生まれくる未だ見ぬ命、そして私が見る事の出来ない命に……